

# 日文研

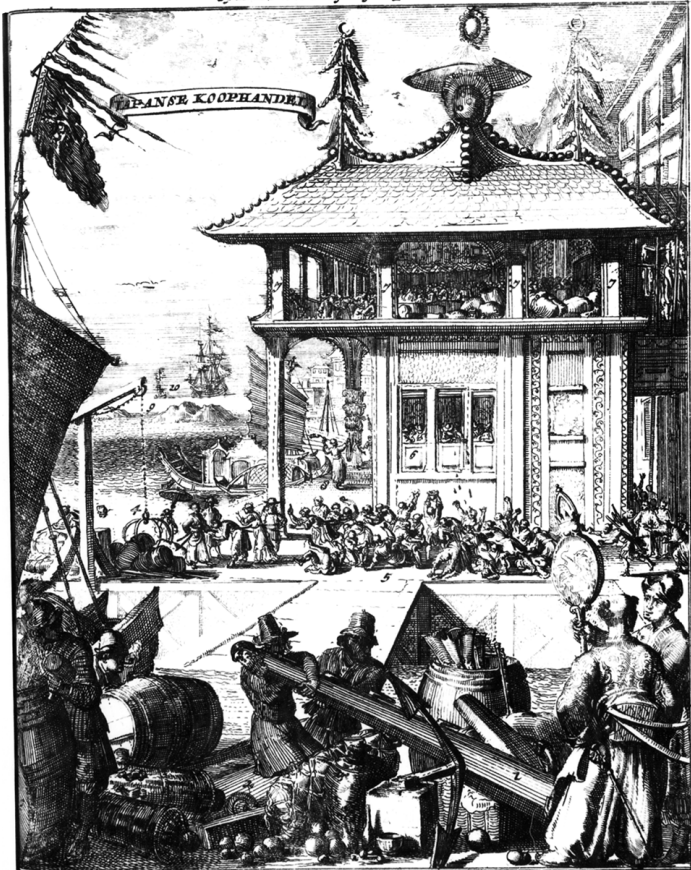
2014年3月

no.52

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター





### 日本貿易図（デ・フリース『東西インド奇事詳解』1682年版所収）

『東西インド奇事詳解』は4冊から構成されたアジアおよびアメリカについての面白い話を集めた娯楽・教養書で、17世紀オランダの中流階級の間で広く読まれていた。日本についても多くの著述が見られる。著者はベストセラー作家デ・フリースである。『東西インド奇事詳解』には約80枚の豪華な銅板図が収録されている。これらの銅板図は17世紀後半に大活躍したオランダの版画家デ・ホーヘが作成した。デ・ホーヘは本文の内容に基づいてアジア諸国の風習や出来事を図像化し、バロック調の流動的な構成の中に巧みに描写している。また、日本のみを対象として描かれた図版も2枚収録されている。本図はそのうちの一つである。オランダ語のキャプションの和訳は次の通りである。

日本の貿易 1. 到着した船の舵 2. 船の大砲 3. 聖書が樽の中に封印される  
4. 荷物のためのクレーン 5. 労働者たち 6. 仕事を与えるオランダ人 7. 長崎の貿易所 8. 布告する役人 9. 「雌鳥とひよこ」島 10. オランダ船

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインス准教授）



# 日文研

——エッセイ——

林 志宣 日文研の新しい伝統作り 2

小特集「世界各地の『研究所』——新たな日本研究へ」

小松和彦 研究所としての日文研 5

金 晃一 地球化時代の研究所の現実と存在意義 11

徐 興慶 台湾における日本研究の現状とその存在意義 14

プラセンジット・ドゥアラ 変わりつつある人文社会科学の役割とアジア研究のアジェンダ 17

ヘレン・ハーデカー ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所 23

ラジ・シュタイネック 学際研究ネットワークの中の日本研究—— 28

チューリッヒ大学重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」の事例を中心に 28

稲賀繁美 フランスの研究所と大学システム 49

榎 本 渉 東京大学史料編纂所と日文研 52

井上章一 日文研の中庭で想うこと 55

——センター通信——

荒木 浩 総研大の広報活動——世界戦略としての学生リクルート 61

資料課資料利用係一同 図書館でのレファレンス・サービス 64

共同研究 66

基礎領域研究 80

彙報 81

所員活動一覧 89

エッセイ

## 日文研の新しい伝統作り

林 志 宣

数日前、韓国人は秋夕（中秋会、日本のお盆に相当）を祝った。この国の祝日では家族が豊かな収穫の喜びを分かち合い、祖先の霊を祀るために集まる。私は一年間の日文研生活を終えて、今年はこの祝いに家族と集まることが出来た。満月がかつてないほど金のように暖かく輝いていたのは、ちょうど佐野先生と鴨川べりの料亭で一ヶ月前に見たものと同じようだった。鴨川は韓国の有名な詩人、尹東柱（ユン・ドンジュ）が一九四〇年代、同志社大学在学中に詩想を練りながら散歩した場所として知られている。そのときには今よりもさらに強く輝いていたかもしれない月を見て、延世大学の秀才だった尹は祖国に思いを馳せた。七〇年後、同じ月がソウルの空高く輝き、私は日文研でやりおえた芸術的な仕事やそこで得たインスピレーションについて、思いをめぐらせていた。

初めて京都を知ったのは、伝統文化・芸術（その多くは世界遺産と認められている）を通してではなく、新たに生まれ発展しつつある芸術を通してだった。四年前、京都芸術センターで、日韓両国の若い芸術家の作品展の開幕式に出席した。その式の一つが現代音楽コンサートで、

コントラバス奏者にしてドイツの大学教授である文屋充徳が私の「Memory」を演奏した。演奏会后、日韓の若い芸術家・音楽家が意見やアイデアを交換する有意義な時間をすごした。栄えある京都賞授賞者にはジョン・ケージほか現代音楽作曲家、そして韓国の著名な芸術家、白南準（ナム・ジュン・パイク）も含まれる。千年の古都、京都は伝統と近代、西洋と東洋が共存する興味深い場所になった。

そのとき以来、京都にすっかり魅せられてしまった。時を超越しつつ伝統を守り、同時に新たな伝統を創造し続ける都市。近くて遠い国、日本を経験したいという欲求が高まるなかで、偶然日文研を知った。細川周平先生に突然連絡をし、不可能と思えるような可能性を訊ねた。世界的に知られた学者が集う研究所に現代音楽作曲家が現われることは、最初、ミスマッチと思えたが、音楽を含めて芸術はつねに歴史のなかで展開しており、音楽史は社会、政治、文化の、芸術の潮流の変化と並行して進んできた。こう考えると日文研は私にとって理想の場所となった。

細川先生は最良の相談相手だった。一緒に連れてもらったある大阪の演奏会では韓国の伝統楽器、伽羅琴（カヤグム）と日本の伝統楽器、箏の共演を聴き、両国の伝統音楽の類似と相違について理解することができた。文楽にも一緒に行き、人形劇で使われる日本の伝統楽器に近代的な響きを聴き取った。神戸大学の学生に自作についてレクチャーした時には、終了後、大田先生や他の先生方が加わり現代音楽の普遍性について議論することができた。稲賀先生に初めて能に招いてもらった時には、やはり近代的な響きを発見した。なぜ二〇世紀になってヨーロッパの現代作曲家がアジアに音楽の新たな発想源を見出したのか、その理由がわかった。稲賀先生の研究会で陶芸家近藤高弘と知り合うと、他の京都在住のアーティストを集めた

発表会に呼ばれ、小さい会ながら、強い印象を残した。日文研で書いたチェロ独奏のための「Chasmos」の初演はギャラリーに改良した町家の畳の上で行われた。その時には大西宏志（京都造形芸術大学）、大船真言の作品が展示され、外の祭りの浮き立つような音があたかも音楽の一部であるかのように混ざり合って流れた。私は長いこと、現代音楽が社会と相互反応することを夢見ていたので、聴衆が自然に外の雑音を今集中している音楽の一部として認めたのは、まさしく記念すべき瞬間だった。

京都市立芸術大学の中村典子先生が強力に推し進めた国際フェスティバル「アジアの管絃の現在」（二〇一三年五月二五日）では日韓の作曲家が集まり、西洋音楽の導入と未来への方向について、深く議論する機会を得た。中村先生はシンポジウムとリサイタルの副題を私がオーケストラのために書き、シンポジウムで改訂初演した作品名から「不可能の可能性を生きる」とした。

日文研で過ごした一年は私にはまさに「不可能の可能性」だった。世界中から集まる客員研究者とアイデアや知識を交換しながら、日文研のなかで世界を体験した。国籍、性別、年齢、専門は異なっても、普遍的な理解を分かち合えた。まさしくこれらの「違い」のために、私たちの会話はますます面白くなり、深まっていった。パトリシア・フィスター先生のイブニング・セミナーでは桜の花、祭り、武道について目を開かされた。こうした話題は私のなかに新たな芸術的な興味と着想を湧き立たせてくれた。私の音楽をオンラインのリサイタルや演奏を聴いた日文研滞在中の研究者が述べてくれた感想は、かけがえのないヒントだった。

来年の秋、日韓の音楽家と振付家が京都で共同参加するパフォーマンスが計画されている。日文研で得た貴重な経験をもとに両国の現代音楽シーンの交流がますます盛んになり、同じよ



うな共同プロジェクトがソウルで展開できればよいと期待している。日文研に初めに到着したときに鼻をくすぐった木の甘い香りや挨拶してきた猿と鹿の家族は、今でも記憶から消えない。来年の秋、京都を再訪した際には日文研にやってきて感謝の気持ちをささげ、人生の贈り物であった時間をもう一度生きたい。

(延世大学教授／元国際日本文化研究センター外国人研究員)

原文…英語

翻訳…細川周平（国際日本文化研究センター教授）

小特集「世界各地の『研究所』——新たな日本研究へ」

## 研究所としての日文研

小松和彦

日文研は、国が必要と認めたミッションを遂行するために設置された研究機関である。当初は文部科学省の直轄の研究機関だったが、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構を構成す

る機関の一つとなったのちも、その運営は国の予算で賄われており、国立の機関であることに変わりはない。また、この大学共同利用機関は、全国的な研究交流の拠点として研究者コミュニティに開かれた運営を確保するとともに、関連する大学や研究機関との連携・協力を促進し、研究者の共同利用および多面的な共同研究を積極的に推進するための機関とされている。

日文研の創設には、二五周年を記念して刊行した『新・日本学誕生』に物語られているように、じつに多くの先輩・諸先生の血のにじむような努力があった。まず、そのことをしっかりと受け止めながら、日文研のミッションにそった活動をしなければならない。

それでは、そのミッションとは何なのか。法令的には「日本文化に関する国際的及び学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力」を行なうとなっている。したがって、日文研の教職員は、この法令にしたがった職務を遂行するために雇用されているのである。

では、なぜ、このような研究機関が組織されたのか。経済大国などといわれながらも、残念ながら、日本に関する知識は、まだ世界の人びとに深く知られているわけではない。したがって、私たちは、海外の多くの国々の人びとに、日本文化に関する正確かつ最新の知識、とくに学術的情報を積極的に発信しなければならず、そのための拠点として、日文研は組織されたのである。

もっとも、学術情報の発信といっても、日文研は日本文化研究の広報機関ではなく、研究機関であるので、国内外の日本研究者との学術的交流・共同研究を通じて、日本に関する情報を収集しかつ発信する、ということが主要な職務となっている。このために、日文研は、海外の研究者をまじえた国際的、学際的、総合的な共同研究を進めるとともに、海外の日本研究者への協力支援を行ってきた。具体的には、海外の日本研究者の招聘、国内外での研究集会や

ワークショップの開催およびそれらの活動を通じてのネットワーク作り、外国語で書かれた日本関連の書籍・資料の収集、世界のどこからでも利用できるデータベースの構築などである。

おそらく、その成果の蓄積は世界に誇るべきものであると思われる。しかしながら、創立三〇年を間近に控えた今日、日文研内外の変化もあって、さまざまな問題をかかえていることも否めない。

草創期の日文研では、社会的貢献つまり研究成果の社会への発信を最優先にした。日文研の名を知らしめることに重点を置いたのである。そのために、梅原猛初代所長は、個人的人脈を生かして、定年直前の有名大学の有名教授を揃えた。こうした教授は、創設された日文研に大きな夢を抱き、その夢に向かってエネルギーを注いだ。しかも、これまでに十分な研究実績と社会的評価をすでに得ており、また幅広い研究人脈をもっていたので、放っておいても次々に著作を刊行するとともに、かれらが組織する共同研究も元気の良い研究者が集まり、それは同時に、日文研のミッションである、国際的、学際的、総合的な研究といった特徴を格別意識することなく実現していた。その成果物を商業出版から刊行するという方針も、無理なく実現でき、講演会にも多くの参加者が集まった。

この方針は今でも変わっていない。しかし、創設期に比べて、研究者が小粒になり、社会への発進力も低下しているといった批判もある。そのいっぽう、所内外の状況の変化のために、さらなる工夫が求められ、その成果をこれまで以上に社会に向けて発信し、その評価を受けるようにしなければならないという状況にある。

真っ先に挙げなければならないのは、研究者の共同研究への関心・情熱の相対的低下であろう。かつては共同研究という研究形態は新鮮であり、参加者はそれを通じて研究を互いに刺激

し合えた。しかし、共同研究・研究集会という研究方式がありふれたものになり、また業績主義の浸透もあって、共同研究の価値は低下してきていることは否めない。

ほとんどの大学等では予算の削減の影響もあって財政が厳しくなり、個人研究費は学会に数回出席する程度しかなく、個人研究費は科学研究費等外部の資金の獲得によることが常識となってきた。したがって、研究者は研究費等の分配を受けることができる大型の科研費による共同研究の代表者や分担者には積極的になるうとするが、日文研のような共同研究は、旅費・宿泊費のみで、調査研究費などがまったくついていない。このため、個人が培ってきた研究成果を吸い上げられる研究会とみなして嫌う研究者も増えてきている。

しかしながら、日文研にとって共同研究は事業の柱であって、これを止めるわけにいかない。それでは、これを魅力あるものにするにはどうしたらいいのだろうか。一番大切なことは、共同研究がたとえ手弁当であっても参加したい思われるような、魅力ある共同研究にすることである。研究代表のそのための責任は重い。研究代表者は自身が設定する共同研究の課題に関して、すでに十分な実績を積み、かつ広くその業績が知られていることが望ましい。ようするに、個人研究の実績がそこでは問われることになるはずである。さらにいえば、参加することで、参加者自身の研究が飛躍的に進展するであろうという期待を抱かせるものでなければならぬ。まかり間違っても、研究成果を吸い上げられるだけだと思わせるような研究会であってはならないのである。

また、共同研究を魅力あるものにする方法として、日文研の共同研究と科研費による共同研究をドッキングさせることも考えなければならないだろう。ドッキングできれば、参加者は調査研究費の分配を受け、個々人の研究を加速することもできるはずである。日文研が研究所で

あることを考えれば、教授たちは、つねに科研の基盤（A）クラスの外部資金獲得を目指すべきなのである。

三人寄れば文殊の知恵といわれるように、共同研究とは個人では考えつかないような文殊の知恵を生み出すことである。その意味で、共同研究はきわめて重要な研究方法である。ところが、問題なのは、自然科学系の研究は、共同研究が主体であり、共同研究の成果が評価される仕組みになっており、その研究を組織し主導した研究代表者、いいかえれば成果報告論文のファースト・オーサーが重要であって、評価はそのチームが受けるのに対して、人文・社会科学系の学問では、相変わらず個人商店的な業績主義が大勢を占めており、業績は査読つきの学会誌への個人論文の掲載や研究成果の単著としての刊行が評価され、共同研究や研究集会の成果物に対する学界や社会の評価システムがないことである。

共同研究の成果物である論文集は、班員（執筆者）たちの「手作り商品」（単著論文）を集めたものであって、研究代表者はその編者にすぎない。こうした成果物は商業出版社からの刊行も容易ではなく、評価がしにくいとみなされているので、学会誌や新聞社の書評等に取り上げられることは希である。残念ながら、人文・社会科学系の共同研究報告書が学会賞を受賞するといったことは聞いたことがなく、またそこに掲載された論文によって職を得たということも聞いたことがない。とすれば、共同研究会への出席率が低下し、寄稿論文の質が落ちるのも、当然のことと言えるだろう。日文研の共同研究や研究集会も、そうした動きの影響を受けずにはいられないわけである。

しかし、このような状況に手をこまねているだけでは、事態は好転しない。前述のような工夫とともに、学会やマスコミなどで共同研究成果物がもっと評価してもらえるように働きか

ける必要があるだろうし、共同研究を評価し科研費などの取得に連動するような仕組みを編み出す必要がある。このためには、所内外で共同研究の成果をきちんと評価するシステムや共同研究を顕彰する賞などを設ける必要も出てくる。

こうしたことは、研究条件を大幅に改善する各種データベースについても言える。データベースの作成は共同作業の性格が強いので、その成果物は自然科学的な研究成果に似ている。その制作者・監修者は自然科学系の論文のファースト・オーサーに相当する。残念ながら、データベースに関しても、それを評価し顕彰するシステムは皆無なのである。

なによりも大切なことは、繰り返しだが、共同研究が楽しく、有意義であり、かつ参加者の研究をいっそう促進できるものにするのである。そのためのさまざまな工夫が求められているのである。日文研の共同研究の場合、「日本文化に関する国際的及び学際的な総合研究」であることが前提となっている。私たちは、組織された共同研究が、国際的であるか、学際的であるか、総合的であるかを、つねに反芻しながら遂行しなければならない。それを遂行するにふさわしい教職員が配置されているかをつねに検証しなければならない。さらにいえば、共同研究をはじめとする日文研の諸事業が、日本研究の国際的な拠点を示すものとなっていることも、たえず検証が必要であろう。

さしあたっての課題は、もっと広報活動を充実させることである。というのも、日文研とはいったい何をしているところなのか、どのような社会的貢献をしているのか、といった各方面からの疑念を払拭するには、広報つまり「活動の見せ方」が欠かせないのである。もはや自己満足しているだけではいけない。日文研は、多くの国民が誇れるすばらしい共同研究をしている機関なのだということを周知させなければならない。すなわち、これこれの実績を挙げたこ

とを説明し、それについての高い評価を受け、また受けているといったことを、具体的に示す必要がある。それが日文研の未来を切り開く強力な方法なのである。

（国際日本文化研究センター所長）

## 地球化時代の研究所の現実と存在意義

金 昶一

歴史的に見ると、自国の歴史と文化に対する研究と、国民的レベルでのその普及と伝播が、国家の最大の関心事となっていた時期がありました。しばしば言われるように、それは近代民族国家の出現を背景に民族アイデンティティ（national identity）を創出しようとする試みの一環と理解されてきました。一八世紀から一九世紀に及んだこのような流れは、二〇世紀に入り、立ち遅れた他の国家や地域に対する支配や統制を強化しようとするこれらの国の意図を背景に、また別の学問の登場をもたらしました。学問分野の中では、人類学が伝統的にこのような経緯で注目されて来ましたが、一九四五年以降、終戦と相まってアメリカで本格化した固有のアプローチの一つとして、地域研究（Area Studies）を挙げることができます。

主に第三世界をはじめとする後進地域や国々といった他者に対する研究を指向した地域研究は、後に自国を対象とする米国研究（American Studies）にも用いられ、これは主に大学や大

学研究所の英文学をはじめとする人文学において地位を確立しました。一方でこれはアメリカの歴史と文化に対する真正性 (authenticity) という側面とともに、また一方ではアメリカ的例外主義 (American Exceptionalism) の強化といったテーゼが入り交じった、多少不自然で自己矛盾的な異なる二つの様相を含んでいました。

後発資本主義国家や、いわゆる第二次世界大戦以後の新生独立国もまた、先進国が一世紀前、もしくはそれ以降に直面した民族国家のアイデンティティの創出と維持という国家的課題を避けて通ることはできませんでした。韓国ではその一環として、国主導による「民族意識の自覚と民族主体性の覚醒」を目標とする韓国精神文化研究院 (二〇〇五年韓国学中央研究院に改称) が一九七八年に設立されました。開院記念式でパク・チョンヒ (朴正熙) 大統領が行った演説では、「韓国学研究の中枢」という言葉とともに「国学研究の総本山」という二つの表現が並んで発せられました。元をたどると、自国の立場から自国の歴史・文化を研究する「国学」(national studies) と、地域研究の一環として他者の視線を反映する「韓国学」(Korean Studies) という二語は、それ以降継続的な討論と論争の素地となりました。

問題は、このような論争が近代学問分野の出現以後、人文学と社会科学との間で繰り広げられた長きにわたる葛藤と重なり、事態をより一層複雑にしたという事実です。文・社・哲を主とする人文学は、自らを国学的伝統の守護者として名乗りを上げ、社会科学者らは比較可能性と普遍性といったレベルでこれに対抗しようとした。一九八〇年代以降のいわゆるカルチュラル・スタディーズや歴史的転換 (Historical Turn) 、そしてポストモダンニズムの登場などは、その支持や共感の有無とは関係なく、このような対立と論争の古びたテーマを弱体化させ、無力化させています。



国の支援と介入と言う点から見ると、国主導による民族アイデンティティーの人為的創出と普及という往年の命題もまた、徐々に時代錯誤になりつつあります。代わりにそれは、より隠然かつ間接的な形に姿を変えてきています。国の領域が縮小したり迂回したりするのは、より対照的に、一九八〇年代以降、いわゆる地球化時代と新自由主義の到来以降、市場領域の飛躍的拡大と包摂の第一の波は主に大学に向けられました。研究議題の設定と方向において、市場と競争論理の支配、商品化可能性の見込みが最優先の考慮事項になる時代の下、大学の理想は崩れています。地球的レベルで進んでいるこのような趨勢は、学問の領域において、研究者自らこのような規範と志向を内在化する自己技術 (self-technology) のイデオロギーを伝播させながら、現実に対する省察と批判としての研究への理想とビジョンを委縮させています。

これとは対照的に、国や公共が支援する研究所の体制が今日享受している相対的自由のための時間は、しかしながら残念なことに暫定的であり、長くは続かないでしょう。公共の支援がなければ実現しなかったであろう大規模かつ長期にわたる基礎研究としての「純粹」学問分野は、市場や国の独占的かつ排他的な利益と動機によって徐々に浸食されつつあります。このような状況において研究者は、市場の公然たる誘惑と国の隠然たる介入から自由な研究の自律空間を確保しなければならないという厳しい状況に置かれています。ヘーゲルが言ったように、ミネルヴァの梟は迫り来る黄昏に飛び立ちますが、いつの時代でもいかなる場所においても、それは自らの意志と構想によるものだったという事実を切実に感じるこの頃です。

(韓国学中央研究院教授)

## 台湾における日本研究の現状とその存在意義

徐 興 慶

台湾における日本語教育の歴史はすでに五〇年をはるかに越えて、特に一九七二年九月の台日国交断絶以後、双方間で実質的関係を積極的に維持しようとするなかで、日本語教育は着実に進展し、現在では目覚ましい成果を上げるに至っている。<sup>(一)</sup> なお、台湾全国においては、二〇〇九年から二〇一二年の間に七つの大学に日本研究センターが設置され、様々な研究分野において、その運営を促している。<sup>(二)</sup>

二〇一〇年一二月、「有識者」らによる有志が企画し、世界各国の日本研究の現状を把握するため、また、台湾大学及び台湾国内における日本研究の発展に向けて、「台日相互理解の思索と実践に向けて」と題する学際的横断的な日本研究フォーラムを開催した。海外からの一五名の報告者は、二一世紀の台湾の日本研究の方向性に対し、日本、中国、韓国、ドイツ、香港など、諸国の日本研究課題、現状、問題点を提示し、さらに、その解決できる方法として「対話」「理解」「比較」及び「主体性」など、示唆に富んだ研究方向の導入を提言した。特に、元文化庁長官青木保教授による講演「異文化の視点…国際日本研究の可能性」では、地域研究(area study)の重要性や米国及びアジア諸国の日本研究の現況が紹介され、台湾大学はすでに日本研究の基礎的条件を具備しているという認識を示された。いずれも台湾における日本研究の未来像に寄与できるものと思われる。<sup>(三)</sup>

台湾大学は台北帝国大学時代に遺された膨大な文化的遺産や多くの貴重な日本研究文献を受け継いでおり、日本研究の伝統的歴史や豊富な研究成果を残している。一九九四年八月、台湾大学に日本語学科が設置されたことは、政府が日本研究に力点を置き始めたという指標でもあり、二〇一四年は創設二〇年を迎えるに至った。これまでの歴史を振り返ると、大学内外の「有識者」のご尽力により、継続的に数多くの日本語及び日本研究にかかわる人材を育てることができ、台日間の実質的交流において無視できない中堅の勢力になっている。

グローバル化、リージョナル化、グローバル化へと急速に移り変わる今日、これまで特に日本語を専門とする人材育成に力を注いできたため、その目標は十分に達成されたといえるものの、日本研究の人材育成の観点からは多くの困難な課題を見出すことができる。たとえば「日本研究」は、政府（行政院国家科学委員会）から学問分野として認知されていない。将来を見据えたとき、台湾が国際社会において日増しに重要視される横断領域的研究という時代の趨勢に対応するためには、先駆者らがその基礎を確立した国内における充実した日本語教育の成果に立脚しつつ、国内の日本研究の人材を育成するという課題に真正面から取り組まなければならないであろう。

台湾大学では「日本総合研究センター」（一九九二～二〇〇〇）及び人文社会高等研究院「日本・韓国研究総合プラットフォーム」（二〇一〇～現在<sup>④</sup>）の研究活動で、すでに日本研究発展のための基礎を築いている。今日私たちは、さらに将来を見据えた展望と大局的な幅広い思考を持ちつつ、人文科学と社会科学の対話を積極的に推進し、横断領域的かつ国を越えた思考のもとに、日台教育、文化交流、研究的価値を向上させなければならない。それらの重要な使命を担うために、二〇一四年二月、台湾大学に日本研究センターが設立された。

これからの二〇年、さらにその後の二〇年は、今日の「対話」「理解」「比較」及び「主体性」のあり方を生かして、人材の育成もさることながら、さらなる熟練した日本研究の活性化を向上させ、人的な交流かつ学術的、実用的な研究成果を為していくことを願ってやまない。換言すれば、台湾にとって、日本という国を「近くて遠い他者」にならないように、そして、自他を認識しながら、日本のよさを学び研究し、日本研究に精通する台湾の若手人材の育成や海外の研究機構とのネットワークの実現に向けて、日台関係、さらに東アジア社会との相互関係をよくするために、国を越えた研究の連携を図り、計画的に国際共同研究の推進が必要であると痛感している。

(台湾大学教授・日本研究センター主任)

- (一) 二〇一四年三月現在、日本語学科、応用日本語学科が設置された大学は四七校にのぼっている。
- (二) 設置順によれば、政治大学(二〇〇九年九月)、中興大学(二〇一〇年六月)、中山大学(二〇一〇年六月)、淡江大学(二〇一一年四月)、東海大学(二〇一一年六月)、輔仁大学(二〇一二年六月)、台中科学技术大学(二〇一二年一月)及び中央研究院「アジア太平洋研究センター」(二〇一〇年一月)などがある。
- (三) フォーラムの詳細は、徐興慶・太田登編『国際日本学研究の基層―台日相互理解の思索と実践に向けて―』(日本学研究叢書一)(台北、台大出版中心、二〇一三年)を参照。
- (四) 筆者が二年にわたり運営した「日本・韓国研究総合プラットフォーム」では、東アジア、欧米各国から七二名の日本研究者を招聘し、数多くの学術シンポジウム、特別講演会を開催してきた。また、将来的には、日本研究にかかわると見込まれる博士課程、修士課程院生向けの大学院生研修を五回実施している。一連の日本研究の活動を通じ、計一〇〇〇名を超える台湾大学

の教員、学生、国内外の数多くの学術機関、研究者らの熱心な参加を得た。このことは台湾大学における日本研究の第一歩が着実に踏み出されたことを意味している。

## 変わりつつある人文社会科学の役割とアジア研究のアジェンダ

プラセンジット・ドゥアラ

まず、私の個人的な事柄から始めることになるが、私は一九九五年に *Rescuing History from the Nation* という本を執筆した。その後、十年も経たない内に、歴史とネーションステートを分離させる必要性は、西洋の学者にかなり受け入れられていることに気付いた。その理由は、二〇世紀前半と比べると、ネーションステートは国民的歴史の記述にほとんど依存しなくなっていたことにある。明らかに、西洋の経済発展国はグローバリゼーションの中で発展途上国と違った時期を占めていたわけだが、概ね今日のネーションステートはナショナルアイデンティティーの構築と発展とともに、グローバリゼーション、民営化、財源拡張などの新自由主義的事業に参入し始めていたのである。

一九九〇年代末になると、人文社会科学研究(HSS)の状況と役割の広範な変化は、皮肉にも近代的、フンボルト流の教育の発生地ヨーロッパで最も顕著であった。フンボルト的な思想は、教育と研究の統一、研究と教育の自由の制度化、そして人文的な個人の価値の促進を追

及した。この思想は、個人と社会の発展の方式を開発するネーションステートにはとても適していた。特にアメリカでは、この思想は大学の一般教養としての教育と結びつけられていた。しかし、現代では殆どのヨーロッパ諸国において、教育は研究と分離されている。研究資金は、益々多額の補助金を獲得する競争に抛るようになっていく。この仕組みは、自然科学研究に倣っていて、個人の研究者が専門化した役割を果たすことになる。評価基準は長期的な影響を持つHSS研究に適していないかもしれない。それほど顕著ではないが、このような傾向はアメリカとアジアにも影響している。

当該論文の役割は、変わりつつあるHSSの状況と役割を検討することにある。各HSS分野の必要条件と役割はかなり異なっているが、今起こっている多大な変化に対する概観の不在は、私たちの諸分野で混乱、さらに絶望をもたらしている。この論文の目的は、変動中のグローバルな状況を考え、HSSの役割を再評価することである。

最も直接的に私達に影響している問題は、新しい研究モデルが私達の研究活動と方法にもたらすメリットとデメリットに関係している。このモデルは、道徳、倫理、感情、(視覚も含めての)審美、批評などを含めた人間と世界の発達に関する理解を促進することができるか？応用科学の道具的方式と同じように、性質的、修辭法的、解枳的な方式をも現象理解に導入することができるだろうか？今日の補助金システムの供給サイクルは、私たちの諸分野が必要とする長時間の資料と著述に没頭することを許容できるのか？如何にして、データの採掘と視覚化で切り開いた新しい機会を発見し、利用して、私たちの研究方法の地平を広げることができるのだろうか？

更に重要なのは、この論文は変わりつつあるグローバルな状況の中での、私たちの諸分野と

その方法の再配置を推奨していることである。これは、必ずしも私たちの研究を、超国籍あるいはグローバル的な空間に移動させるような呼びかけではない。グローバル化の影響は学問の枠組みとしてのネーションへの反省を促している。例えば、今日の世界の中の地域は様々な面で回顧的ではあるが―複数のグローバル的なスケールにおける力とその相互作用によって決定されている。「方法的ナショナルイズム」に代るものは如何に概念化できるのか？このような概念化はどのような意味を持つのか？学術的な知識生産が答えなければならぬ、あるいは答えるべき新しいパワーの配置は、どのようなものだろうか？どの程度まで私たちは研究の倫理的責任を持つことができるのか？如何に共同でグローバル的に私たちの意見を主張できるのか？

倫理の問題は、学問的な探究のモデルの推移の中において、最も重要な問題の一つに繋がっている。フンボルト的なモデルは、個人と人文的価値と関連する内省的な研究モードを推奨していた。今では、これらの価値はナショナルな目的、あるいは国益と矛盾しない目的によって拵えられていたと認められているが、その自律性は一種の批判的自省を可能にしてくれる。この批判的自省は、手段的合理性としての支配的なモデルが把握できない、人口と社会の一部を理解する時に有用になる。Martha Nussbaum は人文的知識が根本的に同情と共感を促進させることに関わっていると主張した。私たちがすでに歴史的に見た―例えば、ナチズムの社会科学と美学―のように、人文的知識はそれだけではなかったが。この線に沿って考えると、人文的知識は、より全面的な、理性的応用的介入方式が起こした効果と影響を含んだ、人間存在の記述を提供できると言えよう。

私たちは、この全面的な理解こそが評価的な意思決定の最適の基準だと考えている。人文的

教育を奨励する理由は例えば、世界におけるフレキシブルな市民権と多文化主義などいくらでもあるわけだが、HSSの最も重要な役割の一つは人間の広範な状況と必要性を考える能力なのである。この背景では、人文学者と理解的な社会科学者は、自然科学者と現実世界の社会問題に興味を持つ専門職と応用的学科の学者とが協力できる新しいプラットフォームを見つけないければならない。

最後に、HSSは変わりゆく世界が如何に新たな研究アジェンダをもたらすかを説明できる新しいテーマを開発すべきだ。そのようなテーマは、例えば「主権と持続可能性」である。今日、多く世界で発生している問題は地域的かつグローバル的であって、気候変動、人口、病気、金融動向などと繋がっている。しかし、これらの問題に対応し得るのはまだほとんど国家レベルの組織である。かつての近代化理論がネーションステート時代での発展に関する諸問題に取り組むために世界範囲での項目を開発したように、私たちは如何に共用主権の時代に入るか、如何にその共用主権に対する倫理的義務を考えるか、如何に新たな主体性と持続可能性のような大きな目標への責任意識を育つか、などの問題をつかめる理論と方法の開発が必要である。

私が所長を務めるシンガポール国立大学アジア研究所では、研究クラスターの中で個人研究と（補助金の申請チームと研究プロジェクトチームとしての）グループ研究が行われている。研究クラスターには、「宗教とグローバルバリエーション」、「アジアのアーバニズム」、「アジアにおける移住」、「科学・技術・社会」、「変革する家族」、「文化研究」等がある。私はさらにメタークラスターを創った。このメタークラスターの目的は、必ずしも所属の研究者を雇わずに各クラスターの研究者と外部からの研究者の活動をコーディネートし、アジア諸国と分野の枠



を超える連鎖への理解を促進させることにある。メタークラスターの名称は「アジアのつながりの歴史社会学」で、ここでの「つながり」は、アジアの中のみならずアジアとのつながりをも指している。

いくつかの新しいテーマが私たちのアジアのつながりへの関心にある。まず、誰よりも日本の気候学者が知っているように、アジアの国を超える、それからアジアを超える国際的解決案は、世界の持続可能性を確保できる唯一の手段である。国連事務総長の気候変動資金に関するハイレベル諮問グループ（AGF）のメンバー西村六善氏は、このように指摘した。気候変動は「あなたの問題、そして私たち全員の問題である。自然は、気候変動がアメリカから、中国から、日本からきているかとは区別しないから」と。「方法的ナショナリズム」の排他主義と対抗できる、歴史、社会科学、人文学的な方法論を開発する任務は、長い歴史の時間（イギリスの社会人類学者 Jack Goody によると青銅時代から）世界は相互依存的であって、常に循環的力で構成されていたのを説明することである。ナショナル的文化・アイデンティティの重要さは否定できないが、実際に私たちが形作っている力が循環的、地域的、それからグローバルであることを証明するのはもっと大きなことだ。従って、主権概念は排他的ではなく、地域且世界範囲での単位と機構が共有できるものでなければならない。

更に前述と関連している、アジア研究所で進められているテーマは災害管理である。二〇一一年春、津波が福島を襲った時、タイにも破壊的な洪水があった。いずれの場合も一ほとんどの災害はそうであるが―その影響は一つではなく複合的であった。福島での災害が如何に増えていくかは説明もいらないだろうが、タイの洪水は、いくつかの大きな工業地区、それからグローバル的サプライチェーンに甚大な被害を与えたため、四五七億米ドルの経済損害を

もたらした。これは、これまで全世界の保険に入った損失のトップテンに入り、タイの毎年  
の財産保険料の二〇倍を超える総額であった。<sup>(1)</sup>ドイツの社会学者 Ulrich Beck は、日本のような  
先進国での二次的あるいは反応的近代化とは、早期近代化の予測しえなかった影響の管理のこ  
とであると指摘している。これらの早期近代化の影響は、さらに自然災害と発展途上国の工業  
化と複合している。事故と自然災害は、互いに地域を超えて世界的範囲に拘れていく。この問  
題は実にグローバル的になっているが、巨大都市の発展が抑制のないアジアと東南アジアでは  
特にそうである。このような状況で必要なのは、技術研究者だけではなく、歴史、倫理、地域  
的知識、ガバナンス、社会資本などを研究できる人材なのである。

どんなに古風なテクストに拠る研究であっても、人文学は、二〇世紀からほかの形の知識と  
ともに、基本的に近代化理論パラダイムに押されてきた。今日の目標は、発展、国家建設、ナ  
ショナルリズム、新自由主義的経済などの付属概念をも含めたその近代化理論パラダイムを、  
「持続できる近代」に変えることである。私たちの目の前にある仕事は、如何にこの新しいパ  
ラダイムに照らして私たちの諸分野を考え直すかにあるのではないだろうか。

(シンガポール国立大学アジア研究所所長)

- (一) これは発展より競合性が重要になってきていることを理解するためにふさわしいシナリオだろ  
うか？新自由主義的なグローバル化が進行する中、ネーションはすでに競争と発展の  
主要な単位ではない。従って、ナショナルアイデンティティーの意図的な構築とナショナル  
な研究は、国家（ステート）にとってその重要さが減少している。研究と教育は、益々ネー  
ションそして世界の中の特定の部分的単位の競合性による要求に従属させられている。

(1) [http://www.swissre.com/reinsurance/insurers/property\\_specialty/Achieving\\_a\\_viable\\_approach\\_to](http://www.swissre.com/reinsurance/insurers/property_specialty/Achieving_a_viable_approach_to)

flood\_insurance\_in\_Thailand\_anz.html

原文…英語

翻訳…鐘以江（同志社大学一神教学際研究センターリサーチフェロー）

## ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所

ヘレン・ハーデカー

一九七三年に創立のハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所（以下、ライシャワー日本研究所）は、二〇一三年に四〇周年を迎え、記念イベントが二〇一五年まで開催される。ライシャワー日本研究所はハーバード大学の日本研究の中心的存在として、日本に関する研究をサポートし、学術活動と思想交流のフォーラムを提供している。また、ハーバード大学の各学部、センター、研究機関の日本関連の活動の連携を推進およびコーディネートし、講演、学会、シンポジウム、展覧会や映画上映などのアウトリーチ活動を通じて、大学以外のその地域の人々の学術的関心にも応えるように尽力している。当研究所のウェブサイトは <http://rijs.fas.harvard.edu/crjp/>。

ライシャワー日本研究所は、ハーバード大学そして世界における日本と日本研究に対するそ

の地域の人々の学術的関心を深めることに尽力している。研究所は大学の授業には直接関わってはいないが、分野、学科、学部を超えた日本関連の教育と研究を推進、奨励し、日本研究分野での教員、特に教授職をサポートするとともに、大学教員の日本関係の授業の開発を支援している。さらに、学部生、院生、ポスドク奨学金や補助金を提供し、日本に関する研究をサポートしている。このほか、ハーバード・イェンチェン図書館、現代日本研究資料センター、人文社会科学の共同研究と研究会をサポートしている。これらの研究プロジェクトは、ハーバード大学とニュージーランド地域での共通の研究関心を持つ教員や学生と合同で行われており、学会、シンポジウムや研究会も主催している。

### 公開イベントおよび講演

ライシャワー日本研究所はJapan Forum 講演シリーズの開催を後援している。この講演シリーズは大学教員、学生、ライシャワー日本研究所所属研究者、一般市民など幅広い層を対象としており、研究を共有する機会となっている。その他、当研究所はハーバード・コミュニティと一般市民のために日本に関するさまざまな芸術、文化的企画を提供している。

### 出版

ライシャワー日本研究所はハーバード大学アジアセンター出版事務室を通して、ハーバード東アジア単行書シリーズで日本関係の出版をサポートしている。当研究所のスポンサーにより出版された単行書のリストは、ウェブサイト <http://rjjs.fas.harvard.edu/newsletters/monographs.php> で閲覧可能。その他の研究所出版物にはバイリンガルのニュースレター「ツーシン」と日本研

究不定期論文集がある。

### 国際プログラム

ライシャワー日本研究所は、積極的に京都アメリカ・コンソーシアムとアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターにおける Study Abroad プログラムを促進している。また、ハーバード日本語プログラムが運営している夏季研修プログラムも支援している。

### 地域的提携

ライシャワー日本研究所は、ボストンとニュートン・マサチューセッツ地域の機関とも密接に連携している。これらの機関には在ボストン日本領事館、ボストン日本協会、ボストン美術館とピーボディ・エセックス博物館等がある。

### 奨学金、補助金およびインターシップ

日本研究の促進を目的として、ライシャワー日本研究所は学部生、院生およびポスドク研究者に奨学金と補助金を提供している。このサポートにより、学生は直接的に日本に関する知識を取得し、言語スキルを習得し、研究を行うことができる。ポスドク奨学金は研究者の博士論文を修正し出版可能な原稿にする機会を提供している。

### 研究プログラム

二〇一一年東日本大震災デジタルアーカイブ・プロジェクト (<http://www.jdarchive.org>) は、

大震災に関するネット上のあらゆる資料、個人証言、ツイッター、更にデジタルリポジトリを構築する国際提携組織のコンテンツの為のアドバンスト・サーチエンジンである。このサイトは、資料検索を簡便にするだけでなく、精選されたコレクションと関心のあるテーマに関するインタラクティブなプレゼンテーションの作成を可能にしている。コレクションとプレゼンテーションは公開しており共有可能である。これによりアーカイブを通してアクセス可能な資料の価値を高めることができる。また、このアーカイブには発達したマップ機能が付いており、リアルタイムのマップ情報が付いている資料をビジュアル化することができる。

**日本の憲法改正に関する研究プロジェクト** (<http://wax.lib.harvard.edu/collections/collection.do?coll=101>)

二〇〇五年にスタートした日本の立憲主義を考察するプロジェクト。特に、現在の戦後憲法改正の発議に焦点を当てている。当プロジェクトのウェブサイトは、憲法改正議論のウェブアーカイブ、関連トピックのニュース、年表、文献目録そして日本憲法改正に関する研究ガイドを提供する。プロジェクトでは年間数回の会議を開催し、憲法改正に関連する問題、特にナショナル・民族的アイデンティティ、女性の社会参入、天皇と皇位継承、国防、宗教と国家の諸問題を分析し、討論している。

**クール・ジャパン…メディア、テクノロジーおよび文化研究プロジェクト**

ライシャワー日本研究所とマサチューセッツ工科大学の共同研究プロジェクトとして、「クール・ジャパン」のトランスナショナルな特色と海外において拡大しつつある影響について考察している。

## 美術および日本密教研究会

当研究会は真言宗と天台宗仏教における日本の伝統美術を研究する。研究テーマは寺院と修道院が密教の伝統美術の発展に果たした役割、絵画的表現とテクスト上の実践、聖地と参詣が密教の伝統美術の発生に果たした役割、近世期の密教寺院の大衆化、日本と中国の密教伝統と実践の比較研究である。

## 現代日本政治研究会

当研究会は一九九九年に日本の政治と外交政策の重要な動向をよりよく理解するために設立された。主要な政策問題に学術的な焦点を合わせている。ハーバード大学 Weatherhead 国際情勢研究センターの日米関係プログラムは本研究会の共同スポンサーである。

**cineEncounters** は六〇、七〇年代以降のあまり知られていないインディペンデントを始めとする日本の名作映画をクリティカルにみるためのフォーラムとして作られ、毎月一度それを上映している。その中に描かれる予想もしないような、非日常的で未知なものを上映後に見た者同士が議論する事を重視している。映画そのものだけでなく、制作技術、映画の裏にある物語と歴史などに関するグループ討論の他に、可能な限り著名な評論者、映画プロデューサー、学者などをその場に招待したりスカイプを通じて討論への参加を実現している。

**日米関係プログラム**は、Weatherhead 国際情勢研究センター (Weatherhead Center for International Affairs) とライシャワー日本研究所の共同スポンサーにより、一九八〇年に設立され

た。当研究会により学者と政府、ビジネス界、財界、新聞雑誌界、NGO機関、その他の分野の優れた専門職の人材がハーバードに集まることができる。彼らは一学年を通して、個人的研究を行い、ハーバード大学の教員と学生、他にはCambridgeとボストンのコミュニティとの間で行われている意見交換に参加する。ポスドク奨学金プログラムは毎年、人類学、経済学、歴史学、政治学および社会学分野からの数名の優秀なポスドクフェローの研究をこの研究プログラムでサポートしている。

(ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所教授)

原文…英語

翻訳…鐘以江(同志社大学一神教学際研究センターリサーチフェロー)

## 学際研究ネットワークの中の日本研究——チューリッヒ大学 重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」の事例を中心に

ラジ・クリスティアン・シュタイネック

### (一) はじめに

日本研究は人文学の中でどのような位置を占めているのか、また人文学に対してどのような



貢献ができるのかについての考え方は、ここ数十年で大きく変わってきた。日本研究という学問分野は、一九世紀の大学において、日本という一つの国の歴史と古典を研究し、記録・保存する企てとして創始されたものだが、日本人の国民性を探ることが研究の中心となり、人文科学が社会科学のアプローチの波に洗われるようになって以降も、その思考パターンがまだ存続している。

そのため、日本国内における日本研究と、海外の日本研究の間に、一つのはっきりとした違いが生じた。日本人による日本研究は、自分と密接な関係にある対象を研究するという閉鎖系の中で、日本国民のアイデンティティーの探求と国民的記憶の保存に向けて研究理念が方向づけられ、豊富な原資料の多様さゆえに、研究者の考えにもかなりの相違が見られる。一方海外の日本研究は、自分たちとは異なる文化の《他者性》を考察するというスタンスとなり、問題意識も使用する資料も、そのパラダイムに影響される。また大学内における日本研究の地位は、日本が、世界の政治・経済大国間に占める地位に応じて変動するきらいがある。

しかしグローバル化による統合が進み、パワー構造が多極化し、国民国家という括りを越える動きも見られるようになってきている今の世界にあつては、日本研究は、日本の内外を問わず、その学問的位置づけと将来の可能性について、ある程度の見直しがなされても悪くない状況にあると思われる。本論は、二〇〇六年にスイスのチューリッヒ大学で採択された、アジアとヨーロッパの文化的・社会的交流についての学際研究プログラムを一つの事例としながら、日本研究を現代の人文科学の一部として組み入れようとする際に、どのような問題があるのか、どのような目的意識と専門性が必要とされるのかについて、実際の経験に基づいて論じたものである。

## (二) 全体的な流れ…国民性研究から人文学研究のネットワークの中へ

何のために日本を研究するのかという問いに対する近代の典型的な答えは、近代の国民国家的発想に基づく文献学のパラダイムを反映し、研究者のナショナルイデオロギーによって大きく異なった。もし研究者が日本人であれば、「日本の歴史、文学、宗教等の文献によって、過去及び現在の日本文化についての知識を構築し保存するのは、われわれ自身を知るため、日本人であるわれわれは一体どのような民族であるのかを知るためである」という内向きの問題設定となった。そこには、研究者と研究対象が共に主体で、研究者は研究対象を学ぶことによって、つまり研究対象を通じての自己理解によって自己形成を行うという循環回路が確立されている。その研究成果が国民に伝えられるときにも、国民も同じ感覚でそれを受け止めてくれるはずだという、公然たる、ないし暗黙の想定があった。研究者の重要な任務は、文学、思想、宗教、芸術の「正典」を編纂することによって、時間を超絶した「想像の共同体」である国民国家の形成に寄与し、現代の日本人と「自分たちの過去」とを繋ぐ尽力をすることであった。

一方、自分を日本人とは思わない（思えない）海外の日本研究者は、こうした親密圏からは締め出されていた。彼らが日本の歴史を辿り、代表的な文献を読むのは、奇異とまでは言わずとも、「異なる」対象、つまり日本の《他者性》をよりよく理解するためであった。日本を何年、何十年研究しても、彼らは畢竟《外部》の観察者に留まる。そうなるも研究の意義も社会的効果も、その《外部性》を帯びてくる。研究から得られた知見は、ある《他者》についての知識として位置づけられ、研究者の属している社会の自己理解に直接裨益することはない。日本の歴史、文学、宗教、社会についての研究は、その研究者の大学や国で奉じられている、歴史、文学、宗教、社会一般についての概念や、またそれらが依拠している理論に、深い影響を

与えることなどは最初から想定されていないのである。

日本人研究者と外国人研究者に共通するのは、『日本』というものが、時間を超越したある本質を帯びていて、日本人、日本美術、日本の宗教といったようなものの意味を規定しているという、日本研究に構造的に根づいてきた信念である。『日本的なるもの』の研究成果は、『日本』と日本の様々な伝統の特殊性に対する情報や知識を増加するが、美術一般、宗教一般の理解を豊かにしてくれるというわけではない。日本が、歴史的、地理的、社会的、言語的、その他様々な文化的差異を超越した本質を有するという『日本本質論』とでも呼ぶべきこうした思考様式は、学問上の考え方にすぎないと思われるかもしれないが、実はその力をもっと構造的に働いており、大学の学部や研究所や研究誌等の構造に入り込むことによって、日本研究のありかた自体を決定しているところがある。そうした体制に埋め込まれている限り、『日本本質論』に伴う諸問題を批判的に考察しても、その批判自体が、『日本本質論』という支配的なパラダイムの中に、うやむやの裡に取り込まれてしまう。事実に基づき、説得力ある方法論的を以て『日本本質論』を批判しても、その批判が訴える力を持つのは、『日本本質論』に意図的に加担することをよしとしない一部の日本研究者にすぎず、大半の研究者たちは、相変わらず、日本の自己イメージ作りや、ポストモダン風の差異や多様性への偏愛を加味した文化的な境界線作りに協力している。そうしたこともあって、多くの研究者が引き寄せられ、政治的な支援が与えられるのは、まだ『日本本質論』的研究の方になっている。

したがって、こうしたことの責めを、国家的な文化政策や研究機関の保守的体質にだけ帰すのは安易に過ぎることになる。卑見では、この『日本本質論』——それは『日本特殊論』に繋がっている——のパラダイムは、三種の研究者集団にとって魅力的であり続けている。一つ

は、日本の歴史、社会、文学等の研究を通じて、日本人の自己理解や「国民の歴史」の保全に寄与していると思っている日本人研究者たち。もう一つは、日本が例外的な国であるということになれば、文化構造的に親近性があつて理解しやすい古代ローマ研究、ドイツ研究、アメリカ研究に比べ、稀少な情報へのアクセス権を持つていという付加価値が認められると同時に、他の地域研究が対応を迫られている方法論的要請の圧力を少なくとも部分的に免れることができる、国外、特に西洋の日本研究者たち。そして最後に、日本が特殊で例外的な国であるということになれば、日本を研究対象から外したり、あるいは日本関連事項を自分の研究に組み入れるにしても、「日本では」という欄外的な扱いに留めたりして、日本を、それぞれの研究に標準的に求められる基本用語や前提に対する挑戦と見なさずに済む利便を得る、日本国外の、社会学、哲学、歴史学等の人文・社会科学系研究者たちである。

ここで、一九八〇年代後期以降、大学院で日本研究を学修後、伝統的専門分野への転出を試みたヨーロッパの日本研究者たちの経験が参考になる。彼らの多くは、日本の文献や資料を従来の専門領域——筆者やチューリッヒ大学の同僚たちの場合、哲学と社会学——に導入して、その分野で研究を継続し博士号を取得した。しかしその後は日本研究を続けようとしても、往々にしてキャリア・パスが閉ざされているため、相当数が再び日本研究に戻ってきている。このことは、二度心変わりをしたというよりも、日本研究を従来型の学問分野に持ち込むことの難しさに対する現実的な認識の結果として捉えられるべきである。従来型の学問分野の研究者たちは、日本研究に馴染みがなく、日本の文献や資料についての専門知識を共有しておらず、学術的スタイルにも相違があつて、彼らの世界に日本研究を持ち込もうとしても、なかなかうまくいかないのが現実なのだ。

しかし、日本研究者たちのこうした集団的経験は、いろいろな意味でヨーロッパにおける日本研究の状況を変える契機にもなった。一つには、方法論的な厳格さと、様々な分野で議論されている大きな理論的問題への意識が高まったことが挙げられる。逆に言えば、これまでの日本研究の総論的アプローチや、ただ日本的なるものを興味のために提示するだけの研究は、それほど高い評価を受けなくなってきたということでもある。一方、やや逆説めくが、日本研究の成果を他の学問分野に導入しようとすることによって、「日本研究」の特色のある知識の重要性が引き立つようにもなった。これらの変化は、いずれも、中・長期的な学際的ネットワークの構築に向かう動きを促進するものである。近年始められた二つのプログラム——チューリッヒ大学の重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」とハイデルベルク大学のCOE「グローバルな文脈におけるアジアとヨーロッパ」——は、まさにそうした学際的ネットワーク構築の試みになっている。

これらのプログラムには、日本研究を変えたもう一つの動きもはっきりと反映している。それは、中国、韓国、南アジア、東南アジア、さらにはイスラム圏といった地域との比較研究や研究協力を奨励することによって、日本研究をより大きな地域研究のネットワークの中に組み入れようとする動きで、ここ二〇年の間に、欧米と日本の一部で顕著になってきている。

日本研究を東アジア研究の一部に組み入れ、国家の枠組みを超えての、長い連続的な社会的・文化的流動を見ようとする新しい意識は多とするに吝かではないが、少なくとも西洋の日本研究においては、アジア全域を強調することには負の側面も伴う。多くの大学が、学術的教育の広角化という観点から、日本研究、中国研究、韓国研究、東南アジア研究といった比較的狭い地域の個別研究を「アジア研究」という名のもとに統合してきたわけだが、研究対象を拡

張する裏で、言語教育、特に前近代のアジアの言語の教育が周縁化されるようになってきている。古語の教育、そしてそれに随伴する古典教育を削減し、広域の現代社会についての教育に置き換えようとする傾向は、科学・教育の経済的効率化という現在の行政方針に沿うものとなっている。しかしこれについても、責めを政治家や大学の執行部にだけ負わせるのは公正とは言えない。一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて広まった、文献学的な《国民性本質論》という近代の古典的パラダイムに対し、やや変則的な形でではあるが、世俗的、反エリート主義的な批判が加えられるようになってきたことも無視できない要因である。近代のイデオロギー的な《国民性》への批判によって、日本研究は、日本特殊論というような狭隘化した文化的視点を乗り超えることができたのだが、その陰で、近代以前の日本についての、日本の《国民精神》を最もよく体現しているとされる《古典》の研究の価値を貶めてしまった。古典研究の価値のアプリオリな承認が失われてしまうと、なぜ日本研究をしなければならないのか、なぜ日本研究に財政的、精神的な投資を行う必要があるのかという疑問が再び頭をもたげてくる。研究者は、大体言い訳めいたことしか言えなくなるし、学生は、そうした疑問に対し大半が同調してしまう。ただ学生の否定的反応をそれほど深刻に受け止める必要はないかもしれない。というのもヨーロッパでは、高等教育を受ける人口比率の増大によって、どの分野においても学生の絶対数は増えてきており、しかも一九八〇年代以降、西洋においてアジア研究に対する人気は高まっていて、前近代の日本に関心を持つ若い研究者数は、増えこそすれ減ってはいると推測されるからである。大学においても経済的視点が幅を利かせ、何につけても数量がものを言う情勢になってきており、学生数が一定数に満たない研究領域は、あっさり廃止されかねない。研究面も同様で、その研究がどれだけ社会的有用性を持つかが、予算配分の大き

な係数になっており、これも「純學術」な前近代の日本研究にとっては逆風である。さらに予算は定常的部分が削られ、競争的予算に回されることが一般的となり、その大部分が、「先端的」で、社会的関連度が強く、国際競争力のある、脚光を浴びやすい名辞を連ねた研究プログラムに与えられる傾向がある。したがって日本研究者たち（特に、前近代の文献学に依存する日本研究者たち）は、こうした全体的な流れを意識して、研究と教育に社会的関連性を持たせるための戦略としても、研究及び大学院教育において、他の学問領域との安定した協力体制を築くことを真剣に考慮すべきである。

以上、日本研究を取り巻く一般的状況について個人的な考えを述べてきたが、次にチューリッヒ大学の重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」における私たち自身の経験を述べてみたい。

### （三）日本研究とチューリッヒ大学重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」

チューリッヒ大学の理事会は、二〇〇五年に、人文学部、法学部、理学部、神学部の一群の研究者たちの申請に基づき、重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ・文化、宗教、社会における《授受》と《線引き》のプロセスと問題点」を承認した。当初予算として、ゲベルト・リュフ基金からの二四〇万スイス・フラン、年間予算として八〇万〜一六〇万スイス・フランがついた。神学と中国研究、歴史学と地理学、イスラム圏研究と民法といったように、これまではかけ離れていると考えられてきた領域の研究者たちが定期的に集まり、ディスカッションと協力を行うためのフォーラムを形成し、その対話の中から学際的な研究協力を発展させていくというのがプログラムの趣旨である。最初に二つの基本的戦略が定められた。第一にプロ

グラムの研究範囲を、特定の狭い領域に限定せず、いろいろな問題意識や目的に対して広く開口を保っておくこと、そして第二に、潤沢な予算の大部分を、博士課程の学生やポストドクターの研究に割り当て、学際研究に対する高い能力と感性を有する若手研究者の育成を図ることである。さらにもう一つ戦略と言ってもいいのは、主にアジアからの著名な外国人研究者——例えば二〇〇七年には日本から思想家の三島憲一教授——を、講演者や客員研究員という形で招き、プログラムの最初から、異領域間だけでなく、アジアとヨーロッパの研究者間の対話の文化を培い、アジアを自らの理論的な声を持たない客体として扱う弊風をできるだけ脱却するよう試みたことである。

最初の数年間、プログラムに携わった研究者たちの主な仕事は、プログラムに応募してきた若手研究者の研究計画を審査し、採用した研究者に、それぞれの分野の専門家が助言をするこゝとであった。週一回の定例研究会では、各研究のプレゼンテーションと、それについてのディスカッション、また定期的に催される講演会では、招待した研究者の講演に続いて真剣な質疑応答が行われた。このプログラムの最初の日本研究関係のプロジェクトは、一九二〇年から一九七〇年にかけての日本の「知識人」という概念の歴史を論じたポストドクター研究で、後で大部の研究報告に纏められた。内容は、知識人の社会的機能についての大正期の議論が、一九五〇年代と一九六〇年代においてサルトルの知識人論に触発された日本での議論で用いられた概念範疇をすでに用意していたことを論じたものであった。もう一つの日本研究関係のプロジェクトは、法学部が主体となって、ヨーロッパと日本における、「プライバシー」「自治」「不道徳」といった概念の比較と、それがセックス産業の契約に対して有する関係の比較を行ったものである。これらのプロジェクトは、「イランにおける麻薬政策のディスコース」（イ



スラム圏研究)、「スイスのインド人移民第2世代の《インド性》」(民族学)、「現代中国における《信頼》の概念」(中国研究)、「現代のタイ映画」(映画研究)、「アジアとヨーロッパにおける《自然》と《自然保護》の概念」(地理学)といったテーマのプロジェクトと併行して実施されたものである。

最初の数年の成果としては、次のようなことが挙げられよう。注目度の高い講演や会議を通して広義のアジア研究に関心を集めてきたこと、意想外の領域間に関係性を確立したこと、異なる研究文化を持つ専門領域間での対話と相互理解を増進し、同時に粘り強さを涵養したことで、そして、このプログラムでなければ出会えなかったような分野での課題上・方法上の予期せぬ洞察をしばしば得たことなどである。

一方で、時間の経過とともに、プログラム当初の設計では、厳しい構造的限界があること、長期に亘って実のある研究を継続していくためには、プログラムの統合性を強化し、焦点をもっと絞る必要があることが明らかとなった。プログラムに携わる研究者たちの参加と支援は、自分たちの抱えている若手研究者への助言と、新しいプロジェクトが検討され採択される会議への出席以上にあまり出ない——つまり、資金獲得のための機会としてしか見ていない——場合がかなり見受けられた。また内容に関しても、様々な領域間の対話を通して生み出される思いもかけぬ洞察が、大きな財政的、心的投資を正当化するだけの価値を持っているとは、なかなか認めてもらえなかった。

そのようなわけで、プログラム開始当初こそ奏功した、テーマを限定せずオープンにしておく方針は、三年目にはすでに行き詰まりを見せるようになった。二〇〇八年には外部評価が実施され、プログラムの基本コンセプトは認められたものの、組織についても研究課題について

も、もっと体系化するようにとの指摘がなされた。それに対応するため、プログラム構成員による会議や大学理事会の審議を経て、二〇〇九年から博士課程に、「アジアとヨーロッパ」という、学際性を強調した特別なプログラムを設けることになった。そして研究課題の体系化に対応すべく、三つの学際的テーマ——①概念と分類、②交錯する歴史、③規範と社会秩序——を共同研究の基軸として設定することが決められた。日本研究の教員もこれらに加わり、特に①と③では、指導的な役割を果たしている。次節では、筆者自身が継続して携わり、二〇〇九年から二〇一三年にかけてコーディネーターを務めた、①の「概念と分類」領域の研究について、その経過を述べることにする。まず研究課題と研究活動について簡単に説明し、次に、その中で日本研究の占めた位置と役割について、幾つか所見を記しておきたい。

#### (四) 研究プログラム「アジアとヨーロッパ」の「概念と分類」プロジェクトにおける日本研究と共同研究

「概念と分類」という研究領域は、アジア研究、神学、宗教学の研究者たちが共有している意識——われわれが何かを研究しようとして物事を特定したり分類したりする際に使う種々の「カテゴリー」は、大体においてヨーロッパ起源のものであり、ヨーロッパの文化史に固有の概念だという前提で使われているのではないかという意識——から生まれてきた。研究の具体的な作業としては、プロジェクト研究者の多くが、古代から中世にかけての精神史の諸相を調査し、近代ヨーロッパの植民地主義的な意識によって、政治的、学術的な分類法が固着してしまいう以前の、「哲学」や「宗教」、あるいは「宗教哲学」としてカテゴリー化されたものの元の姿を探ろうとした。無論、こうした近代のカテゴリーには実質がないわけではないが、カテゴ

リー化によってどのような影響が生じるかに配慮することなく、安易に使われてきた気味がある。さらにそのカテゴリー化は、制定時においても、該当内容が適切に吟味された上でグループ化されたとは言えない上に、長期に亘る世代間の伝達の中で、解釈し直されていくことによって、次第に現実にはぐわなないものになってしまっている。われわれの研究グループの課題は、こうした基本概念について、様々な学術領域で行われてきた批判的議論を見渡し、それらを、関連する代表的な「古典的」文献の概念枠を再構成したものと比較対照しながら、分布している分類法の相対的な歪みと影響をより深く理解することである。われわれはまず「哲学」から始めることにし、定例研究会とは別に、二〇〇九年秋には「古典的テキストの哲学的読み」に関する最初のシンポジウム、二〇一〇年春学期には一連の招待講演会、秋学期には「概念と分類」グループ内の研究者による連続講義、二〇一一年一月には四日間には亘る国際会議を開催してきた。グループ内の研究者間で最初の現状分析を行い、それをアジアや欧米の日本研究者たちと検討してより精緻なものにし、さらにこれまで協力してきた海外の研究者たちの見解を盛り込みながら、最初の研究成果を出すというのがその趣旨である。国際会議は、研究成果の公刊準備のよい出発点となった。現在は、古代から現代に及ぶアジアの伝統と文学に見られる「哲学」概念についての二巻の研究書の上梓に向けて鋭意努力しているところである。

われわれの最初の発見の一つ——そしてそれは、多岐に亘る影響という点で、このプログラムの学際性によって可能になった最も重要な洞察の一つであると私は信じている——は、われわれは、古代から中世にかけてのアラビア、中国、インド、日本のテキストに西洋の「哲学」の概念を適用するのは無理があるという共通認識を持っていたのだが、実際に適用してみている問題には、テキストによって大きなバラつきがあるということだった。その原因として

は、アジアの社会では、思想や知識の領域における社会的な組成と認識上の組成において、地域によって様々な相違があるということ、そしてアジアの文献がヨーロッパ／西洋の学問世界に移植される際の歴史的環境に違いがあったということなどが考えられる。後者の歴史環境上の差異については、例えば、「中国の古典的哲学」と「伝統的な日本思想」について、われわれヨーロッパ人がどのような観念を懐いているかを比較してみると特に明らかになる。

「概念と分類」プロジェクトに対する日本研究の関与は、二つの方向に沿って組織された。一つは、古代仏教思想家の空海と中世仏教思想家の道元の哲学的テキストの批判的研究を通して、彼らの著作において機能している、知識／信念に関する内容に相応しい再カテゴリー化を行うこと、もう一つが、ヨーロッパ人が懐く、近代日本の哲学概念の研究と、西洋において《日本哲学》に纏綿するイメージの解析である。前者については、関連したプロジェクトで、空海と道元のテキストにおける、説得力を生むための修辭法と、言語の概念化について分析的な研究が行われた。<sup>(8)</sup> 後者に関しては、日本の研究者たちと共同で、この種のものとしてはドイツ語では初めての出版となる、日本のアカデミックな思想についての研究書——近代から現代にかけての、思想上の学派（カント派から実存主義まで）や論点（社会思想から心身についての思想まで）についての概観と、個別の思想家についての精細な論考を組み合わせたもの——が二〇一四年の三月に刊行予定である。<sup>(9)</sup> また一つのPhDプロジェクトでは、西田幾多郎の哲学における主体・客体の超克という概念が批判的に考察された。<sup>(10)</sup> われわれの研究は、プロジェクト・チーム内、及び諸会議における招待者や講演者とのディスカッションに多くを負っている。こうした学際的対話から生まれた洞察のうち主要なものを幾つか記しておきたい。一つは、前近代のインドにおける知識世界の認識カテゴリーとの比較

の中で、社会構造が知識世界の区分けに関与してくる——すなわち、概念のカテゴリー化に際し、社会的構造が、カテゴリーの意味と妥当性に影響を及ぼしてくる——ということが判明し、この分野の研究において、当該社会の社会構造を理解することの重要性が明らかになってきたことだ。もう一つは、「中国の古典哲学」に対し西洋人の懐く観念に關してのデイスカッション——特に孟子や荀子の社会的地位と機能についての、社会言語学者ロバート・ガスマン教授の批判的考察——を通じて、こうした古代のテキストに現代的な意味での「哲学」というラベルを不用意に適用することは、たとえそれが温和なものであっても、いろいろな概念的歪みを生じることがはっきりしたことである。「哲学」という概念は、近代においてなぜこのように、一方では強い適用欲求を生みながら、他方では適用に慎重であろうとされるのだろうか？それは、「哲学」というラベルの持つ資格（価値）認定機能に關する問いである。こうした問題意識は、最初宗教学の中で、「宗教」という概念と用語について向けられるようになってきたものである。

この視点は、日本において受容され発達してきた「哲学」概念の研究にとっても有用である。前近代の日本思想のテキストのどれを「哲学」というカテゴリーに入れ、どれを入れなかったかを調べていくと、西洋の“philosophy”が普遍概念としての規範的な連想を強く帯びているのに対し、「哲学」は、その適用において著しく日本化され、過去を引きずる「経路依存性」を呈していることがよく見えてくる。そしてそのことが、世界全体の哲学史、特に日本の哲学史の姿と理念を歪ませる原因になっている。またわれわれの研究チームは、古典的な日本の思想テキストに、“philosophy”の代替となる何かが機能していることを認め、その幾つかを西洋語で把握し、価値評価をすることができた。

このように、専門領域や地域の壁を越えた研究協力は、大きな成果を生むのであるが、一つここに指摘しておくべきは、これまでのところ、学術的な哲学分野との相互乗り入れはごく部分的なものに留まっているということだ。二〇一一年一月のわれわれの会議に哲学研究者が何人か出席したのだが、その後も恒常的に協力してくれる研究者を得ることはできなかった。その原因の一つは、チューリッヒ大学の哲学科が分析哲学のパラダイムに強く傾斜していること、もう一つは、われわれの研究成果の妥当性を哲学領域の研究者たちにもアピールし得るだけの研究業績がまだ十分に蓄積されていないことだと思われる。

二〇一一年一月の会議以後、われわれのチームの定例研究会の焦点は「宗教」の概念の方に移っていった。「哲学」の場合と相同のプロセスに従い、まずチーム内部でディスカッションを重ね、それを踏まえて二〇一一年の秋学期に招待研究者による一連の講演会を開催し、それから二〇一二年一月に大きな国際会議を開いて、チーム内研究者と外部からの研究者がそれぞれの研究発表を行い、その結果をまとめた刊行物が目下準備中である。さらに研究と教育における対話を活性化するため、日文研の磯前順一准教授を客員教授として招聘し、セミナーでのポスト・コロナ理論の講義と、アジアにおける宗教の概念についての、宗教学と日本研究の共同セミナーへの参加を依頼した。磯前教授の招聘によって協力の輪が広がり、理論的な議論も拡大して、その効果は今日まで続いている。

哲学の場合と好対照に、現代の学術的な「宗教」の概念が、近代西洋以外のところで文化的カテゴリーとして適用できるかどうかを巡り、ここ数十年来、宗教関係の研究者の間で熱い議論が交わされてきた。われわれのプロジェクトにもそれが反映し、研究者の参加意欲は旺盛で、理論面で意義ある成果を得ることができた。プロジェクト・チーム内部でのディスカッ

シヨンは、非西洋・前近代のテクストにおける「宗教」関係概念の枠組みを再構成するための研究方法について合意を形成する作業が中心となった。その際に、先の「哲学」概念研究の経験が役立った。また中国語研究者のヴォルフガング・ベール教授による、有名な「大秦景教碑」を題材にした一連の研究会での、ただ「宗教」「教」「道」といった広いカテゴリー用語だけでなく、「寺」「僧」「師」のようなもっと具体的な宗教関連用語についても相応の注意が払われるべきだという説得力ある主張も大変有意義であった。一年間に互る真剣な議論を通して、われわれは共通の課題と方法論を発展させることができたが、一方で、この研究領域に若手研究者を呼び込むことでは苦慮している。日本研究関連プロジェクトとして、山片蟠桃が当時の伝統的知識体系に対して持っていた評価に関する研究を一つ獲得することができたものの、予算付きのPhD研究の公募にはほとんど反応がないのが現状である。若い研究者からの率直なフィードバックがあまりないので、この不人気の理由を客観的に判断しにくいのだが、仄聞するところでは、二つのマイナス要因が作用しているようである。一つは、自然科学系の研究者と違って、人文領域におけるPhD研究は、少なくともヨーロッパでは、自分でテーマを選び、自分の関心に相応しい方法論を用いるのが伝統的だと思われていて、既成の研究構想に従うのは一般的ではないこと、もう一つは、現在の学術環境においては、若手研究者は、近代以前に関するテーマや、概念史といったような抽象度の高いテーマを研究対象にすることを躊躇する傾向があることだ。こうした風潮については、当面即効性のある対策はないが、中・長期的対策として、日本研究の中に共同研究の文化を育んでいくことが大切だと考えている。全体に課せられたテーマと方法論の枠組みの中で、研究チームが緊密に協力し合いながら研究を進めていくという組織体づくりが大事で、それを欠くと、現在の学術に要求されている高

度な分析レベルに達するのが難しくなり、文化の基本的カテゴリーの歴史的再構成といったような大きなテーマについて、実のある成果を出すことはほとんど不可能になってしまふ。

以上、チューリッヒ大学重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」の中の、「概念と分類」領域における、日本研究チームの活動と経験について概括的に述べてきたわけだが、最後に「交錯する歴史」「規範と社会秩序」の二領域についても、日本研究との協力関係と併せて、少し触れておきたい。例として、領域ごとに三つずつ研究テーマを挙げておく（括弧内は主担当となる専門領域）。

## 第二研究領域「交錯する歴史」

- ① 「近代美術」——一九〇〇年頃の日本における西洋概念の芸術の受容（ザンクト・ガレン歴史民俗博物館（スイス）の明治期コレクションを中心に）（東洋美術史）<sup>(二三)</sup>
- ② ナショナル・アイデンティティを超えた地母神たち——二〇世紀初期の仏画の日印美術交流と英国ラファエル前派の〈精神性〉と〈感受性〉の概念（東洋美術史）<sup>(二四)</sup>
- ③ ナショナル・アイデンティティと一九世紀日本の見た西洋像（歴史）<sup>(二五)</sup>

## 第三研究領域「規範と社会秩序」

- ① イスラム的東洋像…日本、中東、西洋のイメージ比較（イスラム圏研究）<sup>(二六)</sup>
- ② ポスト福島原発運動の社会学的分析…「放射線被曝から子どもを守る会」のケース・スタディ（日本研究）<sup>(二七)</sup>
- ③ メディア・セクターと日本社会に対するニューメディアの影響…ポスト福島状況と原発運動（日本研究）<sup>(二八)</sup>



第三研究領域の②と③は、「国境を越える社会的プロテスタと政治紛争」というテーマのより大きなプロジェクト研究の一部であり、社会地理学、南アジア研究、イスラム圏研究の研究者也参加している。このように、日本国内における社会的プロテスタや政治参加の問題を理解するにしても、経済、メディア、コミュニケーションのグローバルなネットワークの中で理解していく必要があるというふうに認識が変わってきており、日本研究も、そうしたネットワークの中しっかりと組み入れられているのである。このプロジェクトを中心になって企画したのは、チューリッヒ大学の同僚であるダヴィド・キアヴァッチ教授で、現在は教授がこの分野のプロジェクトの取りまとめ役となっている。

このように日本研究は、重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」の中の二つの主要研究領域の企画と実施において主導的役割を果たしてきた。研究課題の全体的方向設定、方法的整備を行い、研究、教育、研究発表、出版のすべてのプロセスに実質的に関わってきたのである。このプログラムの全体的戦略は、アジアとヨーロッパの両大陸の研究者間の対話であるから、日本人研究者も定期的に招いて、彼らの研究成果や理論を、様々な領域の研究者たちと分かち合ってもらった。そうした協力関係の中で理論構築を行うことによって、われわれは、日本の「内」と「外」のこれまでの分断状況を多少とも乗り越えることができたと思っている。

#### (五) 日本研究にとって学際研究ネットワークが意味するもの

ここで、重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」のような学際的な研究協力が日本研究にとって持つ意味に焦点を当てて、一般的な視点から少し考えてみたい。

このプログラムによる目に見える効果ということでは、大学内での日本研究の立場がいろいろ

ろな意味で堅固になったことがまず挙げられよう。われわれの研究テーマや問題は、これまでには、文化的ナショナリズムの中での日本的なものに関心を持つ研究者の閉鎖的な世界にしか意味を持たなかったのが、ずっと幅広い層の研究者にも興味を持ってもらえるようになった。日本研究以外の研究者たちも、日本についての文献研究、ないし現地研究が、彼らが現在依拠している、一般理論上の様々な点についての見方を変える可能性を孕んでいることに気づき始めた。また今の時代には、自分たちの研究領域だけでなく、他の領域にも広く適用できる新しい方法論が求められていること、そしてそれを開拓していくための諸問題が日本研究によって提示されていることも認識されるようになってきた。一方日本研究の側も、緊密な学際協力の中から、日本研究の理論構築に向けての貴重な刺激を受けた。「アジアとヨーロッパ」プログラムでは、方法論上の問題が、議論構築のための共通基盤になるので、理論的、方法論的問題に対する構造的な強制力が懸かり、これまで《日本特殊論》についていまいち陥りがちで、理論面での整備が遅れていた日本研究にとって望ましい効果があったと思われる。

もう一つの効果は、大学の組織改革への弾みを与えたことである。異なる領域間の緊密な協力関係の中で、これまで分断されていた東アジア学科、東洋学科、インド研究講座を統合する機運が生まれ、二〇一三年にアジア・東洋研究所が新たに発足した。この研究所は、全七講座で約八〇〇人の学生定員を擁し、人文学部の中でもメジャーな組織となった。それに伴い日本研究も、これまでのエキゾチックな位置づけから、人文学の重要な構成員として遇せられるようになった。その結果、学部、学部の諸委員会、特に新規採用人事委員会への委員選出と発言力という点で、日本研究は大きく前進した。これからは、例えば「一般倫理」「比較文学」「世界歴史」「社会学」といった社会・文化現象を幅広く扱おうとする領域の新規採用人事を行う際に

も、日本研究者たちの考え方がより大きく反映されるようになるであろう。

重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」に携わった個人的な経験を軽々に一般化することには慎重でなければならぬが、このように長期に亙る学際的研究ネットワークに参加することは、前述したように、自分の研究領域の地位を強化する有効な戦略になり得ると言っているように思われる。研究自体に対するメリットも大きい。理論的に強化されるし、全体的に良い影響を受ける。もちろんその分、そこそこの負担増加は覚悟しなければならない。研究上のメリットを得るまでにはかなり多くの時間的投資を強いられる。特に主要な役割を担う研究者は、会議や研究会をコーディネートしたり運営したりする義務が増え、自分自身の専門領域から大きく離れた研究領域の問題にも馴染みを持つための努力をしなければならない。そしてこうした大きな学際的ネットワークの中で研究をする一方で、自分独自の純専門的な研究も深めていかねばならず、両者の間にどのようなバランスを取るかが苦心のしどころになってくる。学際化の潮流の中でも、自分の学術的専門性の堅固な基盤を持つことの重要性は変わらない。それがなければ、より大きな学際研究の課題への寄与も覚束ないものになってしまうだろう。

最後に日本人研究者や日本の研究機関との国際的協力について一言述べておきたい。この点についても、日本研究が、大きな国際的研究協力ネットワークの場に出て行くことは、全体として見ればプラスの効果を期待できる。そういう場に、日本人の（きわめて広義の）日本研究者が参加し、研究成果や理論を発表し、それに基づくディスカッションが行われれば、その情報は、日本研究の枠を超えた幅広い研究者たちにも共有されることになる。

長期的な効果という点では、翻訳の重要性を強調しておきたい。日本人の研究は、西洋語に翻訳されて初めて、西洋の他分野の研究者にとって十分に利用できるものとなる。外国人の日

本研究者のコミュニティーはあまりにも小さく、日本語文献の翻訳が行われることはまれである。特に、翻訳や学術文献の編纂といった地道な文献的基礎作業が、「独創的な研究」に比べて低く評価されてしまう環境にあつては、翻訳に対するインセンティブが低く抑えられてしまう。日本研究に関連する日本の研究機関が、それぞれの研究者たちの重要な研究を、翻訳の専門家によって西洋語に翻訳してもらうための相当額の予算を出してくれるようになれば、それは決定的な意義を持つことになるだろう。

(チューリッヒ大学文学部東洋学科長)

- (一) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/events/guestlecture/speeches-1/mishima.html>
- (二) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/begriffe/projects/terminated/japan.html>
- (三) [http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/begriffe\\_en.html](http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/begriffe_en.html)
- (四) [http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/verflechtungsgeschichten\\_en.html](http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/verflechtungsgeschichten_en.html)
- (五) [http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/normen\\_en.html](http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/normen_en.html)
- (六) [http://www.asienundeuropa.uzh.ch/events/lectureseries/researchingphilosophy\\_en.html](http://www.asienundeuropa.uzh.ch/events/lectureseries/researchingphilosophy_en.html)
- (七) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/events/conferences/whatisphilosophy.html>
- (八) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/begriffe/projects/associated/torik.html>,  
<http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/begriffe/projects/ongoing/japan3.html>
- (九) Steineck, Kaufmann, Lange: *Begriff und Bild der modernen japanischen Philosophie*. Stuttgart: Frommann-Holzboog, 2014. <http://www.frommann-holzboog.de/site/suche/detailsicht.php?wid=517000220>
- (一〇) [http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/begriffe/projects/terminated/japan\\_2\\_en.html](http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/begriffe/projects/terminated/japan_2_en.html)
- (一一) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/events/lectureseries/religionsbegriffe.html>
- (一二) [http://www.asienundeuropa.uzh.ch/events/conferences/religionasia\\_en.html](http://www.asienundeuropa.uzh.ch/events/conferences/religionasia_en.html)

- (一三) [http://www.wasienundeuropa.uzh.ch/research/verflechtungsgeschichten/projects/ongoing/conceptsofart\\_en.html](http://www.wasienundeuropa.uzh.ch/research/verflechtungsgeschichten/projects/ongoing/conceptsofart_en.html)
- (一四) <http://www.wasienundeuropa.uzh.ch/research/verflechtungsgeschichten/projects/ongoing/divinemothers.html>
- (一五) <http://www.wasienundeuropa.uzh.ch/research/verflechtungsgeschichten/projects/associated/japan2.html>
- (一六) [http://www.wasienundeuropa.uzh.ch/research/normen/projects/ongoing/islamicorient\\_en.html](http://www.wasienundeuropa.uzh.ch/research/normen/projects/ongoing/islamicorient_en.html)
- (一七) <http://www.wasienundeuropa.uzh.ch/research/normen/projects/ongoing/movement.html>
- (一八) <http://www.wasienundeuropa.uzh.ch/research/normen/projects/ongoing/fukushima-1.html>

原文：英語

翻訳：南谷覺正（群馬大学教授）

## フランスの研究所と大学システム

稲賀 繁 美

「フランスの研究所と大学システム」というのが、編集部から頂戴した課題だが、組織の改変が頻繁かつ例外だらけで離合集散するフランスの行政組織の全体像を描くことは、もとより筆者の能力を超える。また試みたところで、数年のうちに無意味になるだろう。

筆者は二〇一三年五～六月に École pratique des hautes études (EPHS) の招きにより、パリで一連の授業Ⅱ講演を行った。招聘者は Nicola Fièvre、日本庭園の研究者として著名だが、こ

の段階で Institut des hautes études japonaises の directeur だった。現時点では Collège de France にも席を得た Jean-Noël Robert がこの所長とも兼務となり、多忙を極めていた。なお事務所の住所は 45-47, rue des Écoles, 75005 だが、授業場所は 52, rue Cardinal Remoine, Instituts d'Extrême-Orient du Collège de France との記載があり、両者はまったく別の場所。教室は Salle Claude Lévi-Strauss。正直、筆者にはすでにこれらの複数の呼称の包含関係が詳らかでない。directeurs たちも役職の数だけ電子メールを持たされ、連絡不如意。おまけに指定された番地は、パンテオンの東側からパリ第七大学に下る急勾配の坂道の中途だが、そこには扉などなく、ローマ時代のパリの市の城壁に付属した厳めしい石造りの壁があるばかり。その一角で古い地図には載っていない impasse（行止まりの路地、名称失念）に折れ、その最初の左側の、表札もない、重くて開かない木の扉を無理やり押して入らねばならない。入ると中には守衛が居て、誰何される。フランス人の聴衆も、最初どこが入り口だが見つからなかった、と零していた。物理的にも書類上でも、きわめて煩雑。よほど事情通でなければ、蛮勇を鼓舞しても、とても教室まで辿りつけない。

にもかかわらず、授業には毎回三〇名を超える出席があり、四回目の最終回は五〇名近くに膨れ上がった。多忙のなかオギュスタン・ベルクさんやフィリップ・ボナンさんほかも来てくださり、日本の建築と空間という話題ゆえであろうか、現役の建築家で日仏を股にかけて活躍する面々も現れ、質疑応答も盛り上がった。場所こそ違いが、Collège de France 本部に招聘されて講演するよりこちらの方が気楽で、おまけに実質的には学者としてのフランスでの知的任務を果たせた。だが授業の内容はここでは措こう。受講生の博士論文準備学生は数人にすぎず、あとは他分野を含む研究者や一般市民だったことを付記しておきたい。

最近内装を改めたこの教室が面する中庭の向いには、ビザンチン研究所と図書室があり、その上階にはレヴィ・ストロス生前の執務室が位置している。教室を含む建物はあきらかにアール・デコ様式だが、その上階には中国・日本および韓国の研究図書館が併設されている。実はこうした基礎的な事情ひとつ、筆者は今回招聘されるまで、きちんと把握していなかった。東洋関係の宗教文献図書館は、遙かパリ市内西端に近い Av. du Président Wilson の Musée Guimet とは Place d'Iéna を挟んだ向かい側の建物にあったはずなのだが、これらの図書館群の関係も筆者にはよく分からない。分からないといえ、レヴィ・ストロスの以前の書齋はギメ美術館別館上階の元風呂場に間借りした時代もあるとか。さらにルモワヌ街の図書館の最上階に上がってみると、廊下に沿って、他大学に属するはずの日本研究者の個人研究室が並んでおり、その奥の半円形の眺めの良い部屋は、かつては Collège de France の日本文明講座開設者、故 Bernard Frank の執務室だったが、今年は日本科学史研究の Anick Horieuchi が使っているのだという。その窓の目前からは隣の École Polytechnique の建物と中庭が眼下に臨まれている。その彼方に Collège de France 本部が Université Paris-Sorbonne の古風な建物と向かい合っていて遙かに佇んでいる。千年近い神学・学術の歴史がこの周辺の石造りの建築の錯綜の内に織り込まれていることになる。

すでに文字制限を超えており、École des Hautes Études en Sciences Sociales (EHSS)、あるいは筆者の専門である美術史の国立研究所 Institut national de l'histoire de l'art の沿革や仕組みに触れる余裕もない。前者には社会科学を中心に幾多の directeurs がおり（だから所長というよりは学術指導者）、日本研究所も rue Pierre & Marie Curie に存在する。後者は rue Vivienne の旧来の国立図書館隣の passage にあるが、Université Paris Sorbonne の極東アジア研究所と

の共同企画もあり、筆者はこちらにも頻繁に招聘されている。研究者は相互に知人同士だが、組織上は縦割り乱立の傾向は否めない。パリですでにこの錯綜状態だが、フランスの日本研究に関係する研究者網については、*Bulletin de la Société française des Études japonaises* (SFEJ) に名簿がある。なお、アルザスの Centre européen des études japonaises en Alsace (CEEJA) がストラスブール大学とも密接な関係をもちつつ、英語圏や独語圏を含めた欧州の日本研究網において重要な役割を果たしている。また Maison franco-japonaise à Tokyo, Institut Franco-japonais à Kansai などとの協力関係も、組織水準ではなお未開拓だが、日文研として将来深めてゆく可能性が残されているだろう。大学の日本関係の教育・研究については、稿を改めることとしたい。

(国際日本文化研究センター教授)

## 東京大学史料編纂所と日文研

榎 本 渉

東京大学には附置研究所として史料編纂所がある。前近代の日本史研究にたずさわる者ならば、名前を聞いたことのない者はおよそ存在しないほど、これまで歴史研究に大きな役割を果たしてきた研究機関である。現在の史料編纂所に直接つながる前身組織は、一八六九年に明治天皇の詔を受けて維新政府が設置した史料編輯国史校正局である(以下歴代の前身機関も併せ



て「史料編纂所」と便宜表記する）。東京大学は一八七七年に設立され、史料編纂所は一八八八年に内閣から大学に所属を変更したから、史料編纂所は大学本体よりも古い歴史を有する組織ということになる。

このたび私は、この史料編纂所と日文研について一文を物せよとの指令を受けた。日本史研究者でありかつ東京大学出身であるというところからの人選だろうが、私は二ヶ月間日本学術振興会特別研究員（PD）としてお世話になった（採用直後に他所に転任）以外に同機関に属したことはなく、内情を知悉しているわけではない。したがって私が史料編纂所について述べられるのは、外部の人間としての立場に過ぎない点は断っておきたい。

一般のイメージでは、史料編纂所と日文研は対極的な存在だろう。史料編纂所の当初の使命は日本国の正史（国家の歴史書）の続編編纂だったが、指導的立場にあった重野安繹は清朝考証学の薰陶を受けた漢学者である。彼は史料の収集と厳密な考証を宗とし、久米邦武らとともに実証史学の立場を堅持して、一部のファナティックな国学者や政治運動家たちから歴史学の中立性を守った。史料編纂所は一八九五年を以て編年史料集（『大日本史料』）の編纂に方針を改める。これは一面では正史という国定の「物語」の放棄でもあるが、これによってその実証主義的立場は確定した。昭和の皇国史観やマルクシズム歴史学の台頭の中で、所員個人としてはそれらに傾倒する者がいても、研究所としては史料集編纂を責務とし、特定の政治的立場に与する活動は行なわなかった。史料編纂所のこのような禁欲的な姿勢が、軍部の台頭やGHQ占領の時代をくぐりぬけ、一世紀以上の編纂事業を可能にできたのだろう。

ただし久米の論文「神道は祭天の古俗」（一八九一年）に多くの批判が浴びせられたことから分かるように、厳格な実証史学が必ずしも江湖で全面的な歓迎を受けたわけではない。そ

もそも史料編纂所の第一の使命は歴史の素材である史料の整理・公刊だったが、社会一般で言えば難解な史料集や煩瑣な実証などより、日本の歩みを大きな見地から分かりやすく示す見取り図としての歴史（または史論・歴史哲学）の需要の方が大きかった。これはどちらが優れているかという問題ではなく、一般に歴史に求められる二つの側面である。そして日文研では創設以来、後者Ⅱ見取り図としての歴史が、一定の位置を占めてきた。「学際的研究」「国際協力」を主要コンセプトに掲げ、狭義の日本史学者に限らない国内外の哲学者や文化論者が議論に参加したことが大きな要因だろうが、実証史学の「ぶれない」研究姿勢のみではすくいされない社会の要求や国際的動向に迅速に応じられる柔軟性も期待できた。三年間で成果をまとめる共同研究という形態も、研究に一定の柔軟性を担保すべく設定されたものだろう。これはまったく「実証」的な話ではないが、おそらく日文研は、実証史学のみでは満たされない知的需要を引き受ける役割も果たしてきたのだと思う。

ただし「学際的研究」「国際協力」に類するコンセプトは、文科省の肝煎りもあり、今では日文研に限らず全国至るところで聞かれるようになった。かの史料編纂所も、今では史料収集・編纂の使命は堅持しつつ、より間口の広い研究組織を志向している。たとえば画像史料解析センター・前近代日本史情報国際センターなどを設けて対象とする史料の範囲を広げ、海外資料調査や国際シンポジウムも連年行なわれるようになって久しく、学際性・国際性を獲得しつつある。国内外の研究者の受け入れや共同研究にも積極的で、私も個人として、去年度は臨済宗夢窓派、今年度は中世医書の調査をテーマに共同研究を申請し、受け入れていただいた。恵まれた蔵書というアドバンテージの中で一世紀以上不変の体制に安住しているわけでは決してない。具体的な成案はないので抽象的な物言いしかできないが、日文研も今や「学際的研

究」「国際協力」という題目だけでは独自性を示すことが難しくなりつつあるように見える。その面での先駆者としての地位は重宝すべきだとしても、それに加えて研究の質や広がりを変える何らかの自己変革も必要となってくるかもしれない。

（国際日本文化研究センター准教授）

## 日文研の中庭で想うこと

井 上 章 一

まだ、若いころ、二〇歳台なかばから三〇すぎまで、私は京大の人文研につとめていた。日本部の助手というかっこうで、七年間給与をもらっている。一九八〇年から八七年までのあいだである。

ふるさとの悪口もどうかと思うが、オフィスの見てくれはひどかった。打ちっぱなしのコンクリートで、全体はあらっぽくしあげられている。なのに、古風なアーチをあしらいい、建物は愛想をふりまいていた。現代的な無骨さをあらわしたいのか、それとも過去へのロマンにひたりたいのか。なにをしめしたいのが、わからない。筋のとおらないデザインの建物であった。導線のあるまいも、ぐあいがいいとは、とうてい言いきれない。平面計画もおそまつな、まとまりのない建物であったと思う。

先日、ここをひさしぶりでおとずれた。中は入っていないのでわからないが、外観はこぎれいに生まれかわっている。いろいろな化装をほどこし、ちょっと見られる建物に化けていた。

といっても、人文研がこれをしてなおしたわけではない。研究所じたいは、工学部の旧土木学科校舎へ、移転をさせられている。今、かつての人文研があった建物にはいつているのは、IPS細胞の研究機関である。ここを美しくみがきあげたのも、IPSの研究をになう人々にほかならない。

今をときめくIPSには、それだけの力がある。かつての人文研にはなかった力が、そなわっている。そのことを、私は思い知らされた。ノーベル賞には勝てないなど、感じいったしだいである。

東一条にあるあの建物を、私は書きはじめから、くそみそにけなしてきた。今、あれを見て、けっこうこぎれいだと感じそうな人のために、くりかえす。見ばえがよくなったのは、ごく最近である。もとは、もっとひどかったんだ、と。

書いていてつらいのだが、設計者は京大建築学科の大先輩、棚橋諒である。設計をたのまれたのは一九七二年だから、もう京大の教授職はしりぞいていた。退職後の設計である。完成したのは一九七五年。その五年後に、私はここへかよいだしたことになる。そして、入所早々のころは、こんなふうに感じたりもしていた。

構造力学が専門の棚橋先生では、うまくまとめきれなかったのかな、と。

じっさいには、北隣りの日仏会館から、壁面を南へうつすようねじこまれてもいたらしい。京都市から、想定外の高さ制限をつきつけられるという事情もあった。それで、はじめのくろみどおりには、ことがこばなかったのだという。

それなら、設計を一からやりなおす手も、あったろう。だが、工事をいそいだ京大側に、その時間的なゆとりはない。けっきょく、いくらか手なおしをした設計で、おしきった。いびつな導線の主たる要因は、そこにある。棚橋だけに問題があったわけではない。

それにしても、と思う。壁面の後退と低層化を余儀なくされたわりに、この建物は中庭をひろくとっていた。このこだわりは、どういうことなのか。『人文科学研究所五十年』には、こうある。

「設計者は、自分は若いときに北白川の旧東方学院京都研究所、現東洋文献センターの建物の制作に関係したが、そのときのイメージが今回の設計の基礎になっていると告白された」。

旧東方文化学院の建物に、自分の設計はひきずられているという。

東方文化学院は、外務省の研究所で、一九三〇年に施設は竣工した。武田五一と東畑謙三の設計で、全体はまとめられている。京都を舞台とした近代建築ガイドの本などでは、しばしば紹介されることがある。建築好きには、すっかりおなじみの建物である。まあ、私の書いた『京都洋館ウォッチング』（二〇一一年）は、言及をさけているが。

この工事に、どうやら若いころの棚橋も、かかわっていたらしい。鉄筋コンクリートの構造計算などを、てつだったのだろうか。

構成は、ロマネスクの修道院風になっている。列柱の廊下でかこまれた中庭を、全体の中心にすえた建物である。そのイメージが、一九七〇年代の棚橋からは、ぬぐえなかった。だから、一九七五年にできた人文研の施設も、そのあとをおいかけていたのだという。

一九七〇年代には、旧東方文化学院の建物も、人文研東方部の施設となっていた。東一条に日本部と西洋部の建物をこしらえる。そのさいに、東方部の意匠が手本とされたことじたい

は、じゅうぶんうなずける。

全体の規模とはつりあいのとりづらい中庭ができたことも、わからなくはない。打ちっぱなしのコンクリートとはそりのあわない連続アーチも、のみこめる。旧東方文化学院が手本になったのだとすれば、腑におちる。

ただ、ずいぶん強引にあやかっただなものだなという印象は、いなめない。北白川と東一条では、敷地の事情がちがう。しかも、東一条では、打ちっぱなしのコンクリートでしあげることが、もとめられていた。白いしつこいをぬる余裕のあった北白川とは、この点でも条件がちがっている。

にもかかわらず、東一条の人文研は、北白川の旧東方文化学院を、まねようとした。それだけ、後者の感化力は強かったのだと、言うしかない。あるいは、前者がいだいた憧憬の度合いこそを、強調するべきか。

さて、日文研である。

日文研は、京大人文研のOBたちがこしらえたのだと、よく言われる。中曽根首相（当時）を京都にまねき、その設立をたのみこむ。野村別邸でひらかれたこの会合でも、彼らがホスト役をつとめていた。桑原武夫、今西錦司、上山春平、梅棹忠夫、梅原猛の五人が、そのホスト。そして、梅原以外は、みな人文研のOBである。

日文研の制度にも、人文研のそれからひねりだされたらしいものが、けっこうある。これも、当初の制度設計を、山田慶兒と園田英弘が中心になってがけたせいだろう。やはり人文研で若いころをすごした瀧井一博さんも、この点は納得してくれると思う。

しかし、今回はその詳細にわけいらぬ。もっぱら、建築のつくりをとりあげる。

日文研の設計は、内井照蔵にゆだねられている。この依頼をひきうけ、内井はしばしば京都へ足をこぶようになった。そのおりに、発注者の梅原猛から、どんな示唆があったのかは、わからない。しかし、とにかく、内井の目もまた、旧東方文化学院京都研究所を、さがしあてている。

じっさい、日文研もまた、ロマネスクの修道院を下敷きとしながら、構成は考えられた。列柱廊が全体のなかほどになる配置で、平面はととのえられている。旧東方文化学院とも、その点はつうじあう。

われわれの屋外パティは、もっぱらあの中庭でひらかれる。この点は、旧東方文化学院をひきついだ人文研東方部でも、かわらない。

のみならず、日文研は全体的にスペイン風のテイストで、しあげられている。とりわけ、瓦の選択に私はそのことを感じる。そして、旧東方文化学院もまた、スパニッシュ・ミッション様式で、デザインされていた。

スパニッシュ・ミッションは、一九二〇年代に流行した住宅の様式である。日本では、アメリカからこれがとりいれられた。武田五一は、この様式にとびついた、その代表格と言ってもいい建築家である。

外務省から、旧東方文化学院の設計依頼が武田のところに来たのは、一九二〇年代の末。この仕事に、武田は流行のスパニッシュ・ミッションで、こたえたのである。

余談だが、『人文科学研究所五十年』には、こうある。「デザイン・ソースは、浜田耕作氏の発案になるスパニッシュ・ミッションであるという」。

美術史にもつうじていた浜田のことである。スパニッシュ・ミッションという呼称ぐらい

は、知っていただろう。だが、浜田の「発案」はありえない。このスタイルは、東方文化学院がたつずつと前から、はやっていた。記述はあらためられるべきだろう。京大総長でもあった浜田におもねる者の回想から、この一文はできたのかもしれないが。

いずれにせよ、スペイン趣味も、旧東方文化学院から日文研へ、とどいている。おおよそ六〇年の時をへて、このふたつはひびきあう。プレモダンのスペイン趣味が、ポストモダンのそれへとつたえられた。建築の業界用語をあえてつかえば、そんなふうにも言えようか。

コンクリートのうちっばなしでしあげられた東一条の人文研に、このテイストはない。旧東方文化学院にここがれた棚橋も、スペイン風をとりいれることはできなかった。それを、内井は日文研にもちこんでいる。旧東方文化学院の建築遺伝子は、東一条をこえ、桂坂により濃くつたわったようである。

日文研を設計した内井は、その後、京大の建築学科へ教授として赴任した。武田五一がひらいた学科へ、まねかれたのである。スパニッシュ・ミッシェン様式が、人事の橋わたしをしたとは思わない。だが、なんとも言えないえにしを、そこに感じる。

私は、日文研の床や柱、そして壁を見ながら、今はなき内井照蔵にしばしば語りかける。そして、そこをとおして、旧東方文化学院へも想いをはせることがある。建築が、いやおうなく、私の想いをそこへとはこんでしまうのだ。あの内藤湖南や吉川幸次郎らも、籍をおいていた研究所に。

どうやら、ノイローゼにおちいりだしているようだ。私は管理職からはなれ、しばらくそっとしていくほうがいいようである。

（国際日本文化研究センター副所長）



## 総研大の広報活動―世界戦略としての学生リクルート

荒木 浩

日文研では、一九九二年より、総合研究大学院大学文化科学研究科・国際日本研究専攻として大学院教育を担当しています。同研究科は根っからの大学院大学で、博士後期課程のみで構成され、学部組織及び博士前期課程はありません。三年間で博士号を取得するカリキュラムを構成しています。

したがって、一学年あたり三名程度の大学院生は、すべての教育機関を経て入学します。そのため、外部に向けて適切な広報が必要です。この時代ですから、WEBサイトの活用は当然ですが、そのほかに、ポスターやパンフレットなど

を作成して国内外の関連機関に配布して専攻の概要を告知したり、秋には、日文研の一般公開にあわせて大学院説明会を行っています。しかしなにより特徴的な活動は、海外への発信です。

本専攻は「国際日本研究」という名を負い、日文研の理念である、国際的・学際的・総合的という学問の方法を継承・展開する大学院プログラムです。本稿の「世界戦略としての学生リクルート」というサブタイトルは、編集部からいただいた所与のようですが、実際、世界各国から大学院生を受け入れ教育することは、課せられた最大のミッションでもあります。

その枠組みをアトラダムに並べてみましょう。第一に、総研大が提供する広報的事業経費の活用があります。大きく

分けて二つあります。一つは、専攻の教員が大学院の説明会などを行うもの。もう一つは、本専攻の受験を予定する学生が来日して、本専攻の教育・研究などを体験する機会を提供するものです。毎年必ず行う主な事業は前者です。

国際日本研究専攻では、日文研の海外シンポジウム、海外研究交流シンポジウム、日本研究会、また教員個人に関わる企画や機会を利用して、年度ごとに数回の大学院説明会を行っています。平成一九年以降の開催地を思いつくまに列挙しますと、モスクワ国立大学アジア・アフリカ諸国大学、サンクト・ペテルブルク総合大学日本語学科（ロシア）、華東師範大学（中国）、ロシア国立極東大学付属東洋大学、サンパウロ大学、リオ連邦大学（ブラジル）、ジャワハルラル・ネルー大学（インド）、東北師範大学、通化師範大学、黒龍江大学（中国）、タゴール国際大学日本学院（インド）、インドネシア大学、チュラロンコン大学（タイ）、復旦大学、南開大学、国立中山大学（中国）、The 3rd JSA-ASEAN International Conference（マレーシア）、ベトナム社会科学学院、ベトナム国家大学（ハノイ）人文社会科学大学、ベトナム国家大学（ホーチミン）、人文社会科学大学（ベトナム）、山東工商学院、四川外国语学院、華東師範大学（中国）、ベ

オグラード大学（セルビア）などとなります。

その結果、本専攻には、アジアの学生を中心に、留学生が多く学んでいます。しかし各国ごとの日本研究の事情に違いもあり、また留学の枠組みにも差異があるため、右に述べた広報活動が「学生リクルート」に直結するものではありません。それは第一の目的ではありませんが、それ以外に、こうした活動を通じて、留学生の指導にあたる教員や研究者、また国際交流基金などのロジスティックス機関との連携を深めることや、国際日本研究のプレゼンスを高め、日文研との研究連携により重層的な研究交流が増すことを重視します。

私の参加した例を述べます。二〇一〇年に学会の参加をかねて訪問したタイのチュラロンコン大学で、依頼された大学院の講義と連動させ、さらに、本専攻の修了生で、当時チュラ大の講師であった岩井茂樹氏にも協力を仰いで、二人でインタラクティブに大学院の説明を行うことが出来ました。岩井氏は、その後二〇一二年に、大阪大学日本語日本文化教育センター准教授になって帰国しました。チュラ大の後任には、やはり本専攻の修了生である平松隆円氏が、二〇一三年より赴任しています。

このように、本専攻では、学位取得後、海外の大学や研究

機関などに赴任する例も多く、ラプラタ（アルゼンチン）、フィンランド、中国、韓国、タイ、フランスなどで活躍しています。駐日大使館専門員など、高度専門職業人としての活動も報告されています。

そのために、入学後は海外での研究活動の支援・促進にも力点を置いています。たとえば総研大の学生派遣制度を利用して、応募型の海外出張を奨励しています。ここ二年に限っても、テルアビブ大学（イスラエル）、蘭州大学（中国）、フリア美術館（アメリカ）、ウズベキスタン考古学研究所、クイーンズランド大学（オーストラリア）他での研究活動や学会発表などを支援しました。

本専攻でも、プロジェクト研究という応募・申請型の予算を確保しています。その適用の好例として、昨年、東北師範大学で行われた事業の概略をモデルケースとして報告しておきましょう。学生四人（王莞晗、韓玲玲、簡中昊、栄元）が「東アジア比較文学比較文化自主ゼミ・海外学生交流研究会（於中国・東北師範大学歴史系）参加プロジェクト」という企画を立て、東北師範大学ミニシンポジウム「中日大学院生教育における方法と過程…東アジア研究専攻を中心に」というワークショップに参加しました。東北師範大学からも院生

三名が発表し、本専攻研究生一名（東北師範大学出身）も主に参加しています。シンポジウムの主催者は、元日文研外国人研究員で同大学の韓東育教授です。現地踏査も企画され、元日文研外国人研究員で同大学の王確教授が同行して解説をしました。

日文研という基盤機関で行われる大学院教育として、こうした連携は意義あることだと思っています。このほか共同研究会、シンポジウム、レクチャー、国際研究集会など、日文研の研究事業の多くに院生が参加し、発表したり、支援などを行います。院生は、多様な場を活用して国内外の有力研究者と接し、みずからのポテンシャルを高めていることも最後に付記したいと思います。

（総合研究大学院大学国際日本研究専攻専攻長／  
国際日本文化研究センター教授）

## 図書館でのレファレンス・サービス

### 資料課資料利用係一同

レファレンス・サービスとは、ひと言で言えば資料や調べ物のよろず相談です。先生や院生のみなさんからの依頼に応じて、昭和〇年の新幹線時刻表を調べたり、ある本に月報があるかないかを問い合わせたり、戦前の博物館展覧会情報一覧がどうやら入手できるか探したりします。外国人の先生に「チョベリバってなんですか?」ときかれたこともあります。

戦前のある国の為替レートを知りたい、という相談を受けたことがあります。このときには、まず何を見たらその情報が載っているのか、調べ方を調べます。国立国会図書館の情報提供サイト (<http://navi.ndl.go.jp/navi/index.php>) や分野別の書誌・事典類、その国について書かれた専門書の本文や注釈などを見て、その情報が載っているような文献をピックアップします。そしてその文献を持っている図書館や研究機関を調べ、メールやFAXで該当ページを調べてもらったり、コピーを送ってもらったりします。

専門的な知識や文献については先生や院生のみなさんのほうが詳しいはずですし、ほとんどの方が基本的なことは自分で調査なさった上で、相談に来られます。私たちにできるのは、調べる手がかりがどこに書いてあるか、どこに問い合わせたら必要なことがわかるか、そういうお手伝いです。いまはインターネット上に多くの情報があるため、あれもこれも調べたがそれでも分からなかった、という困難な質問が図書館に持ち込まれます。難しい問題が持ち込まれた時には、係内でお互いに相談し合います。こういう問題にはこういうやり方があるんじゃないか、以前こういう質問があったときにはあの大学が頼りになった、というようにそれぞれの経験を持ち寄って対応しています。

相談の多くが、このことについて調査した上でそのコピーがほしい、というようなILL文献複写や現物入手につながるようなものです。日文研に五〇万冊の本があっても幅広い分野のリクエストに応えるには充分ではありませんから、外部に頼ることになります。他の大学図書館や資料館、文庫などの事務所、政府機関や外国の図書館などに、複写や貸出や調査の代行をお願いする。そのための仲介役をしています。

逆に、他の大学から調査の代行をお願いされることもあります。

ます。日文研には他の図書館では持っていないような洋書やマイクロフィルムが多く、遠くて実際に見に来れない人や複写を求める人が問い合わせを送ってきます。例えば何年何月の新聞に誰々の講演会に関する記事が載っているか、という問い合わせがあれば、その月の全日のマイクロフィルム、見つからなければ別の月のマイクロフィルムも一コマづつ探していきます。何々という本にこういう人物の記事が載っているか、と尋ねられれば探しますし、すぐに分からなければ手がかりとして目次のコピーを送ったりもします。外部から問い合わせてくる人たちは、実際にその資料を自分の目で見て確認することができませんので、私たちがその人たちの目の代わりとなって資料を読むことになります。もしかしたらこの情報が手がかりになるかもしれない、とか、逆に聞かれてないことでもこれを教えてあげなかったら誤解してしまうかもしれない、というようなことを考えながら回答します。

たとえ似たような質問であっても、実際に求めていることは人によって異なります。ですので、質問や調査を受けつける時は、できるだけ相手とコミュニケーションをとって真意を理解するようにしています。時には依頼者ご自身もはっきりと意識していないことが多いので、こちらから質問して確認しなければなりません。いつまでにほしいのか。見つからなかったら代わりのものでもいいのか。日本語と英語どちらの情報がほしいのか。発表に使うのか論文に載せるのか現地へ行く予定なのか。そしてその背景として、先生や院生の方がそれぞれふだんどんな調査研究をしていて、ふだんからどんなことを求めているのかを理解することも、レファレンス・サービスには重要です。お一人お一人に時間をかけて対応ができるのも、この図書館の大事な特徴だと思います。ですから私たちは、新しい先生や院生の方がいらっしゃったら、まず顔と名前を覚えることから始めます。

## 共同研究

(二〇一三年四月一日～九月三〇日)

### 人文諸学の科学史的研究

(研究代表者 井上章一、幹事 瀧井一博)

〔共同研究員名〕

今谷明、上島亨、上村敏文、鵜飼正樹、内田忠賢、長田俊樹、小澤実、小路田泰直、斎藤成也、佐藤雄基、関幸彦、高木博志、高谷知佳、竹村民郎、玉木俊明、鶴見太郎、永岡崇、林淳、シルヴィオ・ヴィータ、藤原貞朗、安田敏朗、若井敏明、大塚英志、荒木浩、伊東貴之、倉本一宏

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一三年七月二九日

長田俊樹「邪馬台国論争―語学研究者の役割」  
小路田泰直「邪馬台国論争―古代編・近代編」

二〇一三年七月三〇日

若井敏明「考古栄えて記紀滅ぶ」

井上章一「考古学・京都学派のあるゆがみ」

〈第二回研究会〉

二〇一三年九月一四日

鶴見太郎「戦中から出発する『戦後史学』―福本和夫の仕事を中心に―」

今谷 明「昭和前半期に於ける日本史学の動向―党派との連関を中心として―」

二〇一三年九月一五日

井上章一「日本の歴史とソビエト史学」  
猪木武徳「大塚史学とは何だったのか」

## 日本庭園のあの世とこの世―自然、芸術、宗教

〔研究代表者〕 白幡洋三郎、幹事 榎本 渉

### 〔共同研究員名〕

小野健吉、グエン・ティ・フォン・チャー、鈴木久男、多田伊織、田中淡、豊田裕章、錦仁、原口志津子、原田信男、飛田範夫、日向進、町田香、水野杏紀、村井康彦、山田邦和、横山正、吉澤健吉、荒木浩、ウィーベ・カウテルト、陸留弟

### 〔海外共同研究員名〕

蔡敦達、外村中

### 〔研究発表〕

#### 〈第一回研究会〉

二〇一三年五月一二日

白幡洋三郎「本年度の研究計画案」

成果出版についての検討

作庭記資料読み合わせ

#### 〈第二回研究会〉

二〇一三年七月二〇日

横山 正「解説『山水并野形図』、『戸山山荘図稿』」

コメント…蔡 敦達

### 質疑応答

陸 留弟「露地について」

### 質疑応答

二〇一三年七月二一日

報告書編集打ち合わせ

## 怪異・妖怪文化の伝統と創造―研究のさらなる飛躍に向けて―

〔研究代表者〕 小松和彦、幹事 山田奨治

### 〔共同研究員名〕

アダム・カバット、飯倉義之、今井秀和、香川雅信、木場貴俊、小林健二、近藤瑞木、齋藤真麻理、佐々木高弘、清水潤、志村三代子、高橋明彦、堤邦彦、常光徹、徳田和夫、永原順子、正木晃、安井眞奈美、横山泰子、大塚英志、徳永誓子、中野洋平、魯成煥

### 〔海外共同研究員名〕

マーク・オンブレロ、朴銓烈、マティアス・ハイエク

### 〔研究発表〕

#### 〈第一回研究会〉

二〇一三年七月二七日

近藤瑞木「化物絵本と絵手本―黄表紙『武家物奇談』の場

## 合

打ち合わせ「成果物作成および国際研究集会について」

## 日本の時空観の形成

〔研究代表者〕 吉川真司、幹事 倉本一宏

〔共同研究員名〕

井上直樹、今津勝紀、上島亨、宇野隆夫、大津透、門井直哉、上川通夫、河上麻由子、神戸航介、佐藤早紀子、下垣仁志、武井紀子、武田和哉、西本昌弘、畑中彩子、林部均、古松崇志、細井浩志、本庄総子、横内裕人、荒木浩榎本渉、徳永誓子、堀井佳代子、劉曉峰

〔海外共同研究員名〕

井上亘

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一三年六月一日

西本昌弘「日出処の元日朝賀と銅鳥幢」

武田和哉「東アジア地域とその周縁・日本における都城の

方位と占地について」

二〇一三年六月一日

上川通夫「中世の時空観の成立」

荒木 浩「言語のライバシーと物語の三国構想」

堀井佳代子「遣唐使の出発時の儀礼について」

〈第二回研究会〉

二〇一三年八月一七日

宇野隆夫「時空間情報科学からみた日本の時空観」

大津 透「日本古代のオオヤケ構造」

二〇一三年八月一日

本庄総子「税帳と税帳使の年度サイクル」

武井紀子「古代日本の農事慣行と地域社会」

吉川真司「天寿国繡帳の時空」

徳永誓子「絵巻物にみる時間表現——『融通念仏縁起』を素

材に——

総合討論

夢と表象—メディア・歴史・文化

〔研究代表者〕 荒木 浩、幹事 マルクス・リュッターマン

〔共同研究員名〕

安東民児、池田忍、入口敦志、上野勝之、鍛冶恵、加藤悦



子、河東仁、笹生美貴子、仙海義之、高橋文治、立木宏哉、玉田沙織、林千宏、平野多恵、福島恒徳、藤井由紀子、松蘭斎、松本郁代、箕浦尚美、室城秀之、木村朗子、伊東貴之、倉本一宏、早川聞多、榎本渉、郭南燕、丹下暖子、中川真弓

〔海外共同研究員名〕

ヨーク・B・クヴェンツァー、李育娟、イヴ・コヴァチ

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一三年五月一日

荒木 浩「近時刊行の『夢と表象』をめぐる研究書・論集等について」

討論「本年度の研究計画について」

鍛冶 恵「日本のねむり衣の文化誌」

二〇一三年五月一二日

立木宏哉「明恵『夢記』における守護というモチーフについて」

討論「本年度の研究計画について」

〈第二回研究会〉

二〇一三年七月一三日

アグネセ・ハイジ「Representation of Dream in Muro-machi Period Zen Buddhist Ink Landscape Painting and Gardening Art」

討論「本年度の研究計画について」

高橋文治「神仙の夢―枕中の中国文学史―」

二〇一三年七月一四日

上野勝之「平安・鎌倉時代の僧と夢の考察・作業メモ」  
河東 仁「元型的表象の発現とイメージ系列化・概念化過程」

討論「本年度の研究計画について」

〈第三回研究会〉

二〇一三年九月二一日

笹生美貴子「中国語訳『源氏物語』について―夢描写を中心に―」

討論「本年度の研究計画、出版計画について」

入口敦志「武家の夢三題―三成、利長、家康―」

二〇一三年九月二二日

仙海義之「『仏祖統紀』における〈夢〉及び〈幻覚〉の記述」  
松蘭 斎「中世後期の日記の夢―日記の変質か、夢の変質か？」

討論「本年度の研究計画、出版計画について」

## 建築と権力の相関性とダイナミズムの研究

（研究代表者 御厨 貴、幹事 井上章二）

### 〔共同研究員名〕

五十嵐太郎、池内恵、小宮京、佐藤信、砂原庸介、手塚洋輔、中村武生、牧原出、松宮貴之、奈良岡聰智、ウィーベ・カウテルト

### 〔研究発表〕

### 〈第一回研究会〉

二〇一三年五月二五日

松宮貴之「政治史料としての『書』の意味に就いて」

中村武生「近世大名屋敷と家臣居所―豊臣三都から幕末京都へ―

### 〈第二回研究会〉

二〇一三年七月二五日

砂原庸介「庁舎と地方政治―県庁所在市の分析から」

小宮 京「大阪財界の挑戦」

昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析―ザ・タイガースの研究

（研究代表者 磯前順一、幹事 井上章二）

### 〔共同研究員名〕

浅尾雅俊、飯田健一郎、小野善太郎、柿田肇、金谷幹夫、黒崎浩行、中村俊夫、永岡崇、藤本憲正、松本清、水内勇太、倉本一宏、細川周平

### 〔研究発表〕

### 〈第一回研究会〉

二〇一三年五月一日

磯前順一「ファニーズからタイガースへ」

飯田健一郎、水内勇太「タイガース現象―ファン投票にみるザ・タイガース」

藤本憲正「タイガース年譜のデータ」

永岡崇ほか「雑誌記事の目録データ」

黒崎浩行「タイガースのデータ形成について」

### 〈第二回研究会〉

二〇一三年七月六日

磯前順一「ザ・タイガース 世界はぼくらを待っていた―全資料から見たその青春」

飯田健一郎『昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析』フィールドワーク ザ・ファニース(タイガース)『青春の思い出の地巡り』(二)―三つ子の魂、百まで―

飯田健一郎、水内勇太、藤本憲正「年譜の社会的出来事欄について」

#### 〈第三回研究会〉

二〇一三年九月九日

金谷幹夫、中村俊夫「研究状況の進展」

飯田健一郎、水内勇太「大阪時代のザ・タイガース(明月荘の写真、ナンバ一番跡地等)」

磯前順一、金谷幹夫、中村俊夫、小野善太郎「原稿『世界はボクらを待っていた』の改訂について」

二〇一三年九月一〇日

中村俊夫「タイガースDVDについて」

#### 近代日本における指導者像と指導者論

(研究代表者 戸部良一、幹事 瀧井一博)

〔共同研究員名〕

五百旗頭薫、猪木武徳、小川原正道、河野仁、黒澤文貴、

佐古丞、佐藤卓己、庄司潤一郎、武田知己、中西寛、野中郁次郎、波多野澄雄、楠綾子、奈良岡聰智、牛村圭、松田利彦

〔海外共同研究員名〕

黄自進、フレデリック・ディキンソン

〔研究発表〕

#### 〈第一回研究会〉

二〇一三年五月一日

瀧井一博「伊藤博文の政治指導における知と制度」

朝霧重治「地方×スモール×グローバル…グローバルとベンチャー精神の企業経営―COEDOビールのケースを通じて―」

二〇一三年五月一二日

黒沢文貴「海軍軍人としての鈴木貫太郎」

波多野澄雄「政治家としての東條英機」

徳川社会と日本の近代化―一七―一九世紀における日本の文化状況と国際環境―

(研究代表者 笠谷和比古、幹事 佐野真由子)

〔共同研究員名〕

## 総合討論

## 〈第二回研究会〉

二〇一三年六月二八日

フレデリック・クレインス「オランダ商館日記にみる日蘭

関係の実情 ワーヘナールの江戸参府日記を中心に」

前田 勉『江戸前期の学校構想』―山鹿素行と熊沢蕃山

との対比―

二〇一三年六月二九日

股座真実子「徳川政権における坊主衆―医者・同朋・茶道

―の成立」

小林龍彦「中根元圭・建部賢弘と江戸幕府」

宮崎修多「大田南畝研究の現在」

## 総合討論

## 〈第三回研究会〉

二〇一三年八月二三日

藤實久美子「武鑑編集の情報源」

松山壽一「近代科学と自然支配の理念」

二〇一三年八月二四日

岩下哲典「会津戊辰戦争の戦後処理問題―松平容保家族の

処遇を中心に―」

磯田道史、伊藤奈保子、岩下哲典、上村敏文、魚住孝至、

大川真、加藤善朗、上垣外憲一、郡司健、小林龍彦、小林

善帆、菅良樹、高橋博巳、武内恵美子、竹村英二、谷口

昭、芳賀徹、長谷川成一、原道生、平井晶子、平木實、藤

實久美子、前田勉、松山壽一、宮崎修多、宮田純、森田登

代子、横谷一子、横山輝樹、米沢薫、脇田修、和田光俊、

滝澤修身、辻垣晃一、伊東貴之、瀧井一博、フレデリッ

ク・クレインス、姜鸞燕、ウィーベ・カウテルト

## 〔海外共同研究員名〕

平松隆円

## 〔研究発表〕

## 〈第一回研究会〉

二〇一三年四月二六日

笠谷和比古「本年度研究会の方針―幕藩制社会の時代区分

## 論―

脇田 修「近世大坂の歴史的流れ」

二〇一三年四月二七日

小林善帆『槐記』にみる一八世紀初・中期の文化様相」

横山輝樹「徳川幕府享保改革における武芸奨励の意義」

上垣外憲一「ボサドニック号事件と勝海舟」

郡司 健「天保く嘉永期における萩藩の西洋兵学受容と大

砲技術」

総合討論

討議「報告論集作成方針」

## 日本仏教の比較思想的研究

〔研究代表者 末木文美士、幹事 稲賀繁美〕

〔共同研究員名〕

阿部仲麻呂、井上克人、冲永宜司、坂井祐円、坂本慎一、  
佐藤弘夫、島蘭進、ミシエル・ダルシエ、永井晋、中島  
隆博、西平直、西村玲、モリー・ヴァラー、シルヴィオ・  
ヴィータ、藤田正勝、前川健一、吉永進一、米田真理子、  
阿部泰郎、アントン・セビア、高橋勝幸

〔海外共同研究員名〕

アンナ・アンドレーワ、鄭濤、許祐盛

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一三年五月一日

末木文美士「趣旨説明」

アンナ・アンドレーワ「三輪山に於ける密教僧と聖の活

動」

鄭 濤「韓国における日本近世古典人文学資料の翻訳出

版および研究の動向」

〈第二回研究会〉

二〇一三年七月一三日

モリー・ヴァラー「夢窓疎石の『正覚国師和歌集』—その

周辺と思想の表現」

阿部仲麻呂「『無』をめぐるキリスト教神学と仏教との比

較研究」

末木文美士「比較思想からみた日本思想」

〈第三回研究会〉

二〇一三年九月二一日

西村 玲「東アジアにおける日本近世仏教—排耶論と不殺

生思想—」

坂本慎一「西田幾多郎、高神覚昇との比較から考える松下

幸之助の思想の位置づけ—実業家の思想と『哲学』の

関係—」

冲永宜司「『生命』はどこにあるのか—ベルクソンの『跳

躍』と西田の生命論を手がかりとして」

## 二一世紀一〇年代日本文化の軌道修正…過去の検証と将来への提言

〔研究代表者 稲賀繁美、幹事 牛村 圭〕

### 〔共同研究員名〕

テレングト・アイトル、鵜戸聡、大西宏志、小倉紀蔵、鞍田崇、呉孟晋、小崎哲哉、近藤高弘、澤田敬司、全美星、戦曉梅、千葉慶、西田雅嗣、西原大輔、波嵯栄ジュニア、しょう子、橋本順光、林洋子、範麗雅、平松秀樹、平芳幸浩、藤原貞朗、シルヴィー・ブロッソー、クリストフ・マルケ、三原芳秋、本浜秀彦、山中由里子、山本麻友美、與那覇潤、マシュー・ラーキング、李建志、渡邊淳司、滝澤修身、張競、中村和恵、山田奨治、劉建輝、磯前順一、榎本渉、フレデリック・クレインス、森洋久、長門洋平、朴美貞

### 〔海外共同研究員名〕

大橋良介、デンニツァ・ガブラコヴァ

### 〔研究発表〕

#### 〈第一回研究会〉

二〇一三年四月二六日

研究会への提言・提案

森 洋久「情報を考える 文字情報と図形情報『地図情報』

報・測量と経緯度グリッド―図形情報処理の近未来』

丸川雄三「情報を考える 文字情報と図形情報『連想情報』

学と想・imagine―図形情報検索の将来展望』

コメントーター…山田奨治

自由討論・意見交換

二〇一三年四月二七日

李 建志「三つの開拓村―パラオ引揚者たちの戦後」

討論

#### 〈第二回研究会〉

二〇一三年七月二八日

長門洋平「イメージに『裏側』は存在するか―映画における

ポスト『表層批評』の射程」

北浦寛之「映画テクスト分析の手法―加藤泰監督『幕末残

酷物語』（一九六四）を題材に」

自由討論・意見交換

二〇一三年七月二九日

稲賀繁美「『日本の建築』はどこへゆく パリでの講演から」

討論

#### 〈第三回研究会〉

二〇一三年八月三一日

三原芳秋「人文学の生態学的転回（エコロジカル・ターンのために）」

高梨克也「生態学的に妥当なコミュニケーション研究にむけて」

岡本雅史「共同注意と人称構造…生態学的転回を迎える認識言語と語用論」

三原芳秋「Personのカテゴリ―文学理論の生態学的転回にむけて」

赤嶺宏介「現象と物自体…カントと哲学の生態学的転回」  
松嶋 健「アニミズムとパーソン…人類学における生態学的転回の深度」

コメント…稲賀繁美

自由討論・意見交換

#### 〈第四回研究会〉

二〇一三年九月六日

日文研公開講演会聴講

討論「講演会の問題をめぐって」

二〇一三年九月七日

デンニツァ・ガブラコヴァ「翻訳とアイデンティティ」

小倉紀蔵「第三の生命…東アジアの伝統からさぐる…」

#### 万国博覧会と人間の歴史―アジアを中心に

（研究代表者 佐野真由子、幹事 井上章一）

##### 〔共同研究員名〕

石川敦子、市川文彦、伊藤奈保子、鵜飼敦子、江原規由、川口幸也、神田孝治、中牧弘允、芳賀徹、橋爪紳也、林洋子、武藤秀太郎、稲賀繁美、瀧井一博、ジョン・ブリーン、劉建輝、朴美貞

##### 〔海外共同研究員名〕

青木信夫、岩田泰、ウィーベ・カウテルト、徐蘇斌

##### 〔研究発表〕

##### 〈第一回研究会〉

二〇一三年五月一八日

論集作成に向けた各自のテーマ案

討論

二〇一三年五月一日

論集作成に向けた各自のテーマ案

今後の研究会の進め方

##### 〈第二回研究会〉

二〇一三年八月四日

EXPO'70 パビリオン見学

解説・橋爪紳也

万博遺跡外視察

大林組・電通制作による大阪万博レア映像上映、自由討論

二〇一三年八月五日

株式会社乃村工藝社資料室視察

解説・石川敦子

## 植民地帝国日本における知と権力

〔研究代表者〕 松田利彦、幹事 瀧井一博

〔共同研究員名〕

飯島渉、小野容照、加藤聖文、加藤道也、川瀬貴也、河原林直人、栗原純、慎蒼健、通堂あゆみ、春山明哲、洪宗郁、松田吉郎、宮崎聖子、やまだあつし、吉川絢子、李昇燁、中生勝美、稲賀繁美、劉建輝、朴暎美

〔海外共同研究員名〕

陳延媛、李炯植

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一三年九月七日

松田利彦「共同研究『植民地帝国日本における知と権力』

の狙い」

各自の研究と問題意識

「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―

〔研究代表者〕 伊東貴之、幹事 榎本 渉

〔共同研究員名〕

青木隆、新井菜穂子、井上厚史、恩田裕正、垣内景子、片岡龍、橋川智昭、権純哲、黒住眞、桑子敏雄、河野哲也、小島毅、鈴木貞美、関智英、銭国紅、高橋博巳、竹村英二、竹村民郎、田尻祐一郎、陳継東、陳健成、土田健次郎、永富青地、西澤治彦、長谷部英一、林文孝、松下道信、水口拓寿、横手裕、李梁、末木文美士、ジョン・ブリン、劉建輝

〔海外共同研究員名〕

フレデリック・ジラルル、黄海玉、張翔、手島崇裕

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉



二〇一三年五月一日

銭 国紅「東アジアの近代化と文化転換―二〇年代中国の新文化構想を読む」

竹村英二「江戸後期―幕末漢学の学問方法―近代知性の醸成要因として」

#### 総合討論

#### 〈第二回研究会〉

二〇一三年六月二十九日

フレデリック・クレインス「蘭学者が西洋医学の機械論的身体観をどのように理解したか」

河野哲也「拡張した自己の境界と倫理」

#### 総合討論

二〇一三年六月三〇日

橘川智昭「唐代唯識思想の心身観―習気と仏性の視点から―」

#### 総合討論

日本の教育文化の複数地域展開に関する比較研究―ブラジル・フィリピン・ハワイ・アメリカの日系教育史を中心に―

（研究代表者 根川幸男、幹事 井上章一）

#### 〔共同研究員名〕

浅野豊美、飯窪秀樹、伊志嶺安博、大浜郁子、カール呉、小林茂子、坂口満宏、佐々木剛二、住田育法、高橋美樹、中原ゆかり、中村茂生、西村大志、東悦子、松盛美紀子、物部ひろみ、森本豊富、柳下宙子、吉田亮、細川周平、石川肇

#### 〔海外共同研究員名〕

小林ルイス・オタビオ眞登、野呂博子

#### 〔研究発表〕

#### 〈第一回研究会〉

二〇一三年四月三日

根川幸男、井上章一「共同研究の概要と日程」

坂口満宏、浅野豊美「福島移民と移民・産業遺跡」

二〇一三年四月四日

根川幸男「日系移植民史の時代区分―『連動史』を描くために―」

#### 史跡見学

#### 〈第二回研究会〉

二〇一三年六月一日

渡部宗助『在外指定学校』から見えること、言えること」

物部ひろみ「戦間期ハワイにおける教育活動と日系社会の

形成」

エドワード・マック「シアトル版日本語讀本」

〈第三回研究会〉

二〇一三年八月三〇日

おけいの墓見学

西村大志「衣からみる移民―身体技法との連関から―」

中村茂生「移民の生活と『修養』」

二〇一三年八月三一日

飯窪秀樹「一九三五年以降の海外興業株式会社の帰趨」

伊志嶺安博「日系ブラジル人子弟に対する日本語教育の変

遷」

聖州義塾創立者ゆかりの地他見学

打ち合わせ「今後の研究会開催と成果出版など」

二〇一三年九月一日

根川幸男「会津・福島からの挑戦―戦前期の海外雄飛と移

民―」

打ち合わせ「今後の研究会開催と成果出版など」

マンガ・アニメで日本研究

〔研究代表者 山田奨治、幹事 荒木 浩〕

〔共同研究員名〕

飯倉義之、石田佐恵子、伊藤慎吾、伊藤遊、岩井茂樹、岡

本健、金水敏、白石さや、山中千恵、山本冴里、油井清

光、横濱雄二、吉村和真、谷川建司、北浦寛之、小泉友

則、高馬京子

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一三年七月二七日

山田奨治「作品検討 TVアニメ『魔法少女まどか☆マギ

カ』（二〇一）」

スクリーニング「TVアニメ『たまこマーケット』

（二〇一三）とその関連映像」

〈第二回研究会〉

二〇一三年九月二一日

岡本 健「作品検討 TVアニメ『らき☆すた』（二〇〇七）、

『けいおん!』（二〇〇九）」

スクリーニング「アニメ映画『TATSUMI』（二〇一一）」

## 新大陸の日系移民の歴史と文化

（研究代表者 細川周平、幹事 瀧井一博）

### 〔共同研究員名〕

赤木妙子、アンジェロ・イシ、桑井輝子、栗山新也、小嶋  
茂、佐々木剛二、スエヨシ・アナ、高木（北山）眞理子、  
滝田（石井）祥子、竹村民郎、日比嘉高、松岡秀明、水野  
眞理子、フェリッペ・アウグスト・ソアレス・モッタ、物  
部ひろみ、森本豊富、守屋貴嗣、守屋友江、柳田利夫、吉  
田裕美、早稲田みな子、高橋勝幸、根川幸男、エドワー  
ド・マック

### 〔研究発表〕

#### 〈第一回研究会〉

二〇一三年四月一三日

守屋貴嗣『『あるぜんちん日本文藝』について』

アンジェロ・イシ「在日ブラジル系メディアの低迷と文学

の夜明け」

討議「今年度の研究会の概要について」

#### 〈第二回研究会〉

二〇一三年七月六日

守屋友江「日本仏教から日系アメリカ仏教へ―一九二〇年

代―一九六〇年代の変化から見えてくるもの」

松岡秀明、エドワード・マック「細川周平著『日系ブラジ

ル移民文学Ⅰ・Ⅱ』

#### 〈第三回研究会〉

二〇一三年八月八日

高知県立歴史民俗史料館、竹村植民商館関係資料、高知県

立図書館他視察

講演・細川周平

二〇一三年八月九日

土佐市図書館視察

森田友和、中村茂生「土佐市と移民」

土佐市移民関係史跡（西原清東生家他）見学

青野 博「ジョン万次郎と仲間たち」

ジョン万次郎関係史跡見学

水野龍関係史跡（水野龍記念碑他）見学

二〇一三年八月一〇日

高知市立自由民権記念館（展示解説他）視察

### 日記の総合的研究の総括

（研究代表者 倉本一宏、幹事 榎本 渉）

## 〔共同研究員名〕

有富純也、板倉則衣、井原今朝男、今谷明、磐下徹、上島  
享、上野勝之、尾上陽介、小倉慈司、加藤友康、久富木原  
玲、古藤真平、近藤好和、佐藤信、佐藤全敏、下郡剛、末  
松剛、曾我良成、中村康夫、名和修、西村さとみ、カレ  
ル・フィアラ、藤本孝一、古瀬奈津子、松蘭斉、三橋順  
子、三橋正、森公章、山下克明、吉川真司、中町美香子、  
荒木浩、井上章一、堀井佳代子、劉曉峰

## 〔研究発表〕

## 〈第一回研究会〉

二〇一三年六月一日

打ち合わせ「原稿の進捗状況について」

堀 忠雄「入眠期の夢とレム睡眠の夢」

## 基礎領域研究

## 古文書研究（継続）

代表者 笠谷和比古

概要 前近代の草書文字で記された古文書や日記・記録な

どの読解を行う。

## 近世風俗未公刊資料解読（継続）

代表者 早川聞多

概要 センター所蔵の近世風俗資料の解読および変体仮名  
の解読演習を行う。

## フランス語運用の基礎／応用（継続）

代表者 稲賀繁美

概要 フランス語の運用の基礎を実践的に訓練し、あわせ  
て必要に応じて論文講読、仏文論文作成の手ほどきをする。

## 韓国語運用の基礎／応用（継続）

代表者 松田利彦

概要 研究その他の業務で韓国語を必要とするものに対  
し、会話、読解、聴解の習得を目指した授業を行う。

## 中国語運用の基礎／応用（継続）

代表者 郭 南燕

概要 研究その他の業務で中国語を必要とする人に対し  
て、中国語運用の基礎を実践的に訓練し、会話、読解、聴  
解の習得を目的とする。

# 彙報

(平成二五年四月一日～九月三〇日)

## 人事異動

- 平成二五年四月一日 称号授与  
名誉教授 鈴木貞美
- 平成二五年四月一日 併任  
副所長 井上章一
- 平成二五年四月一日 昇任  
研究部教授 劉建輝
- 平成二五年四月一日 契約  
(客員)  
外国人研究員 根川幸男(ブラジリア大学外国語・翻訳学部准教授)
- 外国人研究員 徐禎完(翰林大学校日本語研究所所長)
- 外国人研究員 陸留弟(華東師範大学外国語学院日本語学科教授)

外国人研究員 鄭 澐(檀國大學校日本研究所所長)

●平成二五年四月一日 契約更新

(特任研究員)

特任教授 井村哲郎

特任准教授 寺村裕史

●平成二五年四月一日 採用  
研究部助教 北浦寛之

●平成二五年四月一日 委嘱  
(客員)

教授 谷川建司(早稲田大学大学院政治経済学術院客員教授)

教授 阿部泰郎(名古屋大学大学院文学研究科教授)

教授 中勝美(桜美林大学文学系教授)

教授 吉川真司(京都大学大学院文学研究科教授)

准教授 奈良岡聰智(京都大学大学院法学研究科准教授)

准教授 中町美香子(京都大学文学部非常勤講師)

●平成二五年六月一日 契約

(客員)

外国人研究員 嚴紹盪(北京大学比較文学・比較文化研究所教授兼所長)

外国人研究員 アグネセ・ハイジマ(ラトビア大学助教)

●平成二五年六月三〇日 契約満了

(客員)

外国人研究員 カセム・ズガリ(フランス国立東洋言語文化大学フランス日本協会研究者)

(客員)

外国人研究員 アンナ・アンドレーワ(ハイデルベルグ大学カール・ヤスベルス・センターアカデミックフェロー)

外国人研究員 鄭澐(檀國大學校日本研究所所長)

●平成二五年七月一日 契約

(客員)

外国人研究員 戴曉美(復旦大学日本研究センター准教授)

外国人研究員 マリーナ・コヴァルチュク

## (高等師範学校研究員)

外国人研究員 ハンス・トムセン (チュー

リッヒ大学教授)

◎平成二五年七月一日 昇任

研究部教授 松田利彦

研究部教授 瀧井一博

◎平成二五年七月三十一日 契約満了

(客員)

外国人研究員 魯 成煥 (蔚山大学校人文大

学教授)

外国人研究員 嚴 紹璽 (北京大学比較文学・

比較文化研究所教授兼所長)

◎平成二五年八月三十一日 契約満了

(客員)

外国人研究員 ウィーベ・カウテルト (ソウ

ル国立大学環境大学院准教授)

外国人研究員 陳 小法 (浙江工商大学准教

授)

外国人研究員 林 志宣 (延世大学教授)

◎平成二五年九月一日 契約

(客員)

外国人研究員 高馬京子 (ミコラスロメリス

大学アジアセンター長)

外国人研究員 唐 権 (華東師範大学准教

授)

外国人研究員 エリザベッタ・ボルク (ハワ

イ大学客員教授)

外国人研究員 朴 暎美 (二松学舎大学客員

研究員)

外国人研究員 劉 曉峰 (清華大学教授)

◎平成二五年九月三〇日 契約満了

(客員)

外国人研究員 徐 勇 (北京大学歴史学系

教授)

外国人研究員 ハンス・トムセン (チュー

リッヒ大学教授)

外国人研究員 陸 留弟 (華東師範大学外国

語学院日本語学科教授)

◎平成二五年九月三〇日 辞職

文化資料研究企画室准教授 丸川雄三

総合研究大学院大学文化科学研究科  
国際日本研究専攻入学者

(平成二五年度四月一日入学)

宇佐美智之

研究テーマ 環日本海における先史人類生態

に関する研究、中央アジア・シルクロード

都市遺跡に関する研究

主任指導教員 井上章一教授

副主任指導教員 小松和彦教授、山田奨治教

授

小泉友則

研究テーマ (幼い) 子どもの性の歴史研究

主任指導教員 井上章一教授

副主任指導教員 白幡洋三郎教授、早川聞多

教授

光平有希

研究テーマ 西洋音楽療法思想と近代日本に

おける受容

主任指導教員 フレデリック・クレインス准

教授

副主任指導教員 牛村 圭教授、細川周平教授

## 山村 燮

研究テーマ 明治期の陽明学理解

主任指導教員 伊東貴之教授

副主任指導教員 倉本一宏教授、磯前順一准教授

## 日文研フォーラム

第二六六回「平成二五年四月九日（火）」

発表者 カセム・ズガリ（フランス国立東洋言語文化大学フランス日本協会研究員／日

文研外国人研究員）

コメンテーター 笠谷和比古教授

テーマ 武術伝授に見る東西両世界

第二六七回「平成二五年五月一日（火）」

発表者 アンナ・アンドレーワ（ハイデルベルグ大学カール・ヤスベルス・センターアカデミックフェロー／日文研外国人研究員）

コメンテーター 末本文美士教授

テーマ 中世日本に於ける密教僧と神祇崇拜——伊勢、三輪山等を中心とする両部神道説について

第二六八回「平成二五年六月一日（火）」

発表者 魯 成煥（蔚山大学校人文大学教授

／日文研外国人研究員）

コメンテーター 松田利彦准教授

テーマ 耳塚の「靈魂」をどう考えるか

第二六九回「平成二五年七月九日（火）」

発表者 ウィーベ・カウテルト（ソウル国立大学環境大学院准教授／日文研外国人研究員）

コメンテーター 白幡洋三郎教授

テーマ ヨーロッパ貴族と日本美——知られざる一七世紀のジャポニスム——

第二七〇回「平成二五年九月二〇日（金）」

発表者 ハンス・トムセン（チューリッヒ大学教授／日文研外国人研究員）

コメンテーター 鈴木堅弘京都精華大学特別研究員、佐野真由子准教授

テーマ 春画を語る・語る春画——春画を西洋

の大学で教える諸問題——

## 木曜セミナー

第一九六回「平成二五年四月一八日（木）」

話者 寺村裕史特任准教授

テーマ 古墳はどのような「場所」に築造されたのか——三〇六世紀の前方後円墳の立地と眺望分析から——

第一九七回「平成二五年五月二三日（木）」

話者 倉本一宏教授

コメンテーター 井上章一副所長、荒木浩教授

テーマ 書評 倉本一宏著『藤原道長の日常生活』（講談社現代新書、二〇一三年）

第一九八回「平成二五年六月二〇日（木）」

話者 北浦寛之助教授

テーマ テレビ時代の日本映画とその変革の諸相

第一九九回「平成二五年七月一八日（木）」

話者 細川周平教授

コメンテーター 根川幸男日文研外国人研究

## 員

テーマ 『日系ブラジル移民文学』を上梓して

第二〇〇回 [平成二五年九月一九日(木)]

話者 徳永誓子機関研究員

テーマ 「融通念仏縁起」の研究―物語絵にみる日本中世の信仰世界―

## Nichibunken Evening Seminar

第一七六回 [平成二五年四月一一日(木)]

発表者 マイケル・ディラン・フォスター  
(インディアナ大学准教授／日文研外国人研究員)

テーマ UNESCO Comes to Kagoshima: Ritual, Depopulation, and the Problem of Intangible Cultural Heritage

第一七七回 [平成二五年五月九日(木)]

発表者 マーク・コーディ・ポルトン (ピクトリア大学教授／日文研外来研究員)

テーマ Uncanny Realism: Mimesis and Metamorphosis in Japanese Theatre and Beyond

第一七八回 [平成二五年六月六日(木)]

発表者 アンナ・アンドレーワ (ハイデルベルグ大学カール・ヤスベルス・センターアカデミックフェロー／日文研外国人研究員)

テーマ Childbirth and Women's Health in

Heian and Kanakura Japan

第一七九回 [平成二五年七月四日(木)]

発表者 マッツ・カールソン (シドニー大学シニア講師／日文研外来研究員)

テーマ Hara Setsuko's Screen Career: The Intersection between Eternal Virgin and Eternal Madonna

第一八〇回 [平成二五年九月五日(木)]

発表者 ロテム・コーネル (ハイファ大学教授／日文研来訪研究員)

テーマ The Birth of Mutual Recognition: European and Japanese Visual Images of Each Other during the Edo Period and the Quest for Generalization

## レクチャー

第一三九回 [平成二五年五月一六日(木)]

発表者 フロレンティノ・ロダオ・ガルシア (マドリッド・コンプルテンセ大学情報学部社会歴史コミュニケーション科准教授)

テーマ Fascist Spain and the Japanese War Efforts, 1937-1945

主宰者 細川周平教授

第一四〇回 [平成二五年八月八日(木)]

発表者 アグネセ・ハイジマ (ラトビア大学准教授／日文研外国人研究員)

テーマ The Iconology of 14th-16th Century Japanese Ink Painting with Focus on Sesshu's *Landscape Scroll of the Four Seasons*  
主宰者 バトリシア・フィスター教授

## 学術講演会

第五三回 [平成二五年五月二二日(水)]

講演者 梅原 猛顧問  
テーマ 私の学問と芸術



司 会 戸部良一教授

第五四回「平成二五年九月六日（金）」

講演者 森 洋久准教授

テーマ 古地図とナビゲーシヨン技術

講演者 荒木 浩教授

テーマ 知らず顔の桐壺院―〈園外〉の源氏

物語論

司 会 光田和伸准教授

## 所外講演会

【日本文化を考える】（有楽町朝日ホール）

「平成二五年七月六日（土）」

講演者 松田利彦教授

テーマ 志賀潔と朝鮮

講演者 井上章一副所長

テーマ 革命の語り方

司 会 末木文美士教授

## シンポジウム

第一一四回「平成二五年六月一六日（日）」

主宰者 瀧井一博准教授

テーマ 近代日本の国家観―学際的考察―

参加者 一〇名

第一一五回「平成二五年七月二一日（日）」

二二日（月）」

主宰者 磯前順一准教授

テーマ 宗教と公共性―神道と宗教復興から

参加者 二二名（国内二〇名、国外二名）

第一一六回「平成二五年七月二六日（金）」

二七日（土）」

主宰者 ジョン・グリーン教授

テーマ 国際シンポジウム 転換期の伊勢

参加者 七二名（国内六五名、国外七名）

第一一七回「平成二五年八月二六日（月）」

主宰者 末木文美士教授

テーマ 「妙貞問答」の諸問題

参加者 一二名

## 海外研究交流ネットワーク形成

【第一回E A J S日本会議・日文研シンポジ

ウム】

「平成二五年九月二七日（金）」

テーマ 日欧交流五〇〇年紀を前に―航路

の形成と情報の拠点

場 所 国際日本文化研究センター講堂

## 会議

### 運営会議

第三一回 平成二五年 六月二八日（金）

### 調整会議

第一八七回 平成二五年 四月 三日（水）

第一八八回 平成二五年 四月 一七日（水）

第一八九回 平成二五年 五月 八日（水）

第一九〇回 平成二五年 五月 二二日（水）

第一九一回 平成二五年 六月 五日（水）

第一九二回 平成二五年 六月 一九日（水）

第一九三回 平成二五年 七月 三日（水）

第一九四回 平成二五年 七月 一七日（水）

第一九五回 平成二五年 九月 四日（水）

第一九六回 平成二五年 九月 一八日（水）

### センター会議

第一八七回 平成二五年 四月 四日（木）

第一八八回 平成二五年 四月 一八日（木）

第一八九回 平成二五年 五月 九日(木)  
 第一九〇回 平成二五年 五月二三日(木)  
 第一九一回 平成二五年 六月 六日(木)  
 第一九二回 平成二五年 六月二一日(金)  
 第一九三回 平成二五年 七月 四日(木)  
 第一九四回 平成二五年 七月一八日(木)  
 第一九五回 平成二五年 九月 五日(木)  
 第一九六回 平成二五年 九月一九日(木)

## 外国人来訪者

四月五日 陳 弱水(台湾大学文学院長)、  
 徐 興慶(台湾大学日本語学科教授)

## 海外渡航

倉本一宏 教授  
 目的 フォロ・ロマーノ、コロッセオ、ポ  
 ンペイ遺跡等の現地調査  
 目的国 イタリア  
 期間 平成二五年四月五日〜九日  
 瀧井一博 准教授  
 目的 ハーバード大学ライシャワー研究所

にて資料調査及び研究打合せ

目的国 アメリカ

期間 平成二五年五月二日〜六日

郭 南燕 准教授

目的 台湾中央研究院にてシンポジウム出

席及び発表

目的国 台湾

期間 平成二五年五月九日〜一二日

稲賀繁美 教授

目的 フランス国立高等研究院にて講義、

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館

にて講演、カタールニャ国立美術館にて資

料調査

目的国 フランス、イギリス、スペイン

期間 平成二五年五月一〇日〜六月一九日

小松和彦 所長

目的 高麗大学校にて講演

目的国 韓国

期間 平成二五年五月二六日〜二八日

磯前順一 准教授

目的 ソウル市京城神社跡にて現地調査、

漢陽大学校比較文化研究所にてシンポジウ

ム出席及び発表

目的国 韓国

期間 平成二五年五月三〇日〜六月二日

劉 建輝 教授

目的 青島市図書館、档案馆にて在外関連

資料調査

目的国 中国

期間 平成二五年六月二日〜五日

森 洋久 准教授

目的 釜山外国語大学にて講演及び情報収

集

目的国 韓国

期間 平成二五年六月六日〜九日

松田利彦 准教授

目的 ソルボンヌ大学にてシンポジウム出

席及び発表、Y. Jun Peace Museum、ス

ウェーデン国立公文書館にて資料調査

目的国 フランス、オランダ、スウェーデン

期間 平成二五年六月一二日〜二二日

佐野真由子 准教授

目的 イギリス国立公文書館、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館、大英博物館にて史料調査及び情報収集

目的国 イギリス

期間 平成二五年六月一二日～七月八日

マルクス・リュッターマン 准教授

目的 フンボルト大学にて共同研究

目的国 ドイツ

期間 平成二五年六月一四日～七月三十一日

末木文美士 教授

目的 中国人民大学にてシンポジウム参加及び発表

目的国 中国

期間 平成二五年六月一八日～二一日

戸部良一 教授

目的 ロシア国際関係大学にてシンポジウム参加及び発表、ペレヤスラヴリ、モスクワにて史跡見学

目的国 ロシア

期間 平成二五年六月二〇日～二四日

劉建輝 教授

目的 台湾中央研究院にて学会出席及び発表

目的国 台湾

期間 平成二五年七月一〇日～一四日

郭南燕 准教授

目的 上海図書館等にて資料調査

目的国 中国

期間 平成二五年七月一日～一七日

稲賀繁美 教授

目的 A I L Cにて資料収集、ソルボンヌ大学にて学会出席、ケ・ブランリ美術館にて資料収集

目的国 フランス

期間 平成二五年七月一五日～二七日

白幡洋三郎 教授

目的 フランクフルト都市史研究所、ヴェルツブルク市立文書館にて資料調査

目的国 ドイツ

期間 平成二五年七月二四日～三一日

山田奨治 教授

目的 カリフォルニア大学、サンフランシスコアジア美術館にて資料調査

目的国 アメリカ

期間 平成二五年七月三〇日～八月六日

末木文美士 教授

目的 アテネ大学にて学会出席及び発表

目的国 ギリシャ

期間 平成二五年八月二日～一二日

瀧井一博 教授

目的 ハーバード大学ライシャワー研究所にて文献調査及び基礎的研究

目的国 アメリカ

期間 平成二五年八月二日～平成二六年八月一日

劉建輝 教授

目的 北京大学、清華大学にて資料調査

目的国 中国

期間 平成二五年八月一六日～二一日

郭南燕 准教授

目的 ベルゲン大学にて学会出席及び発表

表、ワルシャワ国立美術館、ポーランド国立図書館にて資料調査

目的 国 ノルウェー、ポーランド

期間 平成二五年八月一九日～九月二日

榎本 涉 准教授

目的 遼寧省博物館にて実地踏査、遼陽博物館、鳳凰山等にて資料調査

目的 国 中国

期間 平成二五年八月二五日～九月一三日

磯前 順一 准教授

目的 ブリティッシュコロンビア大学にてシンポジウム出席及び発表、The Jimi Hendrix Museumにて見学、Christine Liang

氏自宅にて聞き取り調査

目的 国 カナダ、アメリカ

期間 平成二五年八月二七日～九月三日

細川 周平 教授

目的 日秘文化会館にて資料調査、サンバ

ウロ人文科学研究所にてセミナー出席、サンパウロ大学にて集中講義

目的 国 ペルー、ブラジル

期間 平成二五年八月三〇日～九月二七日

井上 章一 教授

目的 国 ソウル大学にて学会出席及び発表

目的 国 韓国

期間 平成二五年九月一日～三日

小松 和彦 所長

目的 ジャワハルラル・ネルー大学にて研究打合せ、学会出席及び発表

目的 国 インド

倉本 一宏 教授

目的 大学間共同言語文化図書館にて会議

出席及び発表、フランス国立図書館にて資料調査

目的 国 フランス

期間 平成二五年九月一七日～二四日

パトリシア・フィスター 教授

目的 ベンシルバニア州立大学にてシンポジウム出席及び発表

目的 国 アメリカ

期間 平成二五年九月二七日～一〇月二日

郭 南燕 准教授

目的 上海図書館、芸海劇院、上海大寧劇院にて現地調査

目的 国 中国

期間 平成二五年九月二九日～一〇月六日

所員活動一覧（二〇一三年四月一日～九月三〇日）

荒木 浩

●著書

（共著）小峯和明編著『日本文学史 古代・中世編』『第Ⅱ部中世の文学 第九章説話集と法語』ミネルヴァ書房 二〇一三年五月  
『デジタル人文学のすすめ』（楊曉捷・小松和彦と共編）勉誠出版 二〇一三年八月

●論文

「知識集積の場―中世への表徴として」荊部直・黒住真・佐藤弘夫・末本文美士編『岩波講座 日本の思想 第二巻 場と器―思想の記録と伝達』岩波書店 二〇一三年五月

「宮澤賢治『二十六夜』再読―浄土教から法華世界への結節と『月天子』―」『日本仏教総合研究』第一一号（二〇一二年度号）日本仏教総合研究学会 二〇一三年五月

「第一セッション 説話とメディア―媒介と作用―」『メディアとしての文字と説話文学史―矜持する和語、質疑応答』説話文学会編『説話から世界をどう解き明かすのか 説話文学会設立五〇周年記念シンポジウム「日本・韓国」の記録』笠間書院 二〇一三年七月

「『国文学』のミレニアム―レトロブロスベクティブなデジタル元年」楊曉捷・小松和彦・荒木浩編『デジタル人文学のすすめ』勉誠出版 二〇一三年八月

●その他の執筆活動

「学融合推進センター運営委員からのメッセージ」『学融合推進センターNews Letter』第一二号 総合研究大学院大学学融合推進センター 二〇一三年五月

「書評 河東仁編『夢と幻視の宗教史 上』（リットン）」『週刊読書人』二〇一三年六月二八日号

## 磯前順一

## ● 著書

『どこにもいないあなたへ―恋愛と学問についてのエッセイ』秋山書店 二〇一三年五月

『國の思考 他者・外部性・故郷』法政大学出版局 二〇一三年八月

## ● 論文

「アラブから近代日本を考える―複数の近代をめぐる」『一神教学際研究 (JISMOR)』八 同志社大学一神教学際研究センター 二〇一三年三月

「複数性と排除…『他者なき他者』の世界を生きたために」『東京大学宗教学年報』三〇 二〇一三年三月

「国民国家という幻想を越えるために」『福音と世界』二〇一三年一〇月号 新教出版社

「被災地に胎動する新たな宗教性―『カフェ・デ・モンク』をめぐる」『世界』二〇一三年一〇月号 No. 288 岩波書店

## ● その他の執筆活動

「書評 西川長夫『植民地主義の時代を生きて』」『週刊読書人』二〇一三年八月九日号

「特集・島蘭先生ご退官 安ずることなき精神―生涯一研究者であること」『東京大学宗教学年報』別冊三〇 二〇一三年八月

## 伊東貴之

## ● 論文

「中国近世思想脈絡中所見の欲望…調和与共生」中国社会科学院歴史研究所中国思想史研究室主办『中國哲學』第二十六輯 中国社会科学出版社 二〇一三年八月

## ● その他の執筆活動

「項目執筆『経世致用』他一一項目」編集代表 尾崎雄二郎・竺沙雅章・戸川芳郎『中国文化史大事典』大修館書店 二〇一三年四月

「書評『非日常という日常―「文革」の息吹と異邦人の「眼差し」』」『図書新聞』第三一〇六号 二〇一三年四月一三日号

## 稲賀繁美

### ● 著書

「執筆協力」『Okakura in the global Context』「日本再発見」「中国踏査旅行」「ベンガル知識人たちとの交流」「ミッション・イン・ボストン」「英文著作にみる OKAKURA」「天心のメディア戦略』『別冊太陽 日本のあるところ』二〇九 岡倉天心 近代美術の師』平凡社 二〇一三年六月

### ● 論文

「クールベ『石割り』の軌跡——政治と芸術」永井隆則編『フランス近代美術史の現在…ニュー・アート・ヒストリー以後の視座から』（初版第二刷）三元社 二〇一三年四月

「観光案内に載らないパリ案内（中）（下）——日曜日と月曜日、たった二日で廻れる、知られざる街中の秘境『あいだ』二〇二・二〇三号（連載第九五・九六回）二〇一三年四・五月

「非母語という類似餌（ルアー）には何が掛かるか」郭南燕編『バイリンガルな日本語文学—多言語多文化のあいだ』三元社 二〇一三年六月  
“Japanese Philosophers Go West: The Effect of Maritime Trips on Philosophy in Japan with Special Reference to the Case of Watsuji Tetsuro (1889-1960),” *Japan Review* No. 25, 2013.

「カタルーニャのジャポニスム——バロセロナ・カイシャ・フォーラムでの展覧会より（前）（後）」『あいだ』二〇六・二〇七号（連載第九七・九八回）二〇一三年八・九月

### ● その他の執筆活動

「多国籍化する専門書店への羨望 パリの新刊書店にみる昨今の事情——書店の現在を考える（1）」『図書新聞』第三〇二一号（連載一二三六）二〇一三年五月

「なぜ台湾の誠品書店は元気がよいのか 日本の新刊書扱い大型書店に奮起を願う——書店の現在を考える（2）」『図書新聞』第三一一四号（連載一三七）二〇一三年六月

「武術伝授について…カセム・ズガリさんとの対話から」『かみはま合気道』二〇一三年度版第一五号 三重大学合気道部OB会 二〇一三年六月

「水族館を思い出してみて」『小論文』（再掲）代々木ゼミナール二〇一三年第一学期  
 「韓国に比較文学の『辺境』を踏査する―国際比較文学会 第十九回ソウル大会（Aug. 15-21, 2010）の報告と反省」（再掲）『韓国比較文学会』  
 第六〇号 二〇一三年六月

「洋書と和書の棲み分けを廃止しよう―外国書の売り上げ落ち込みに日本の病理を探る―書店の現在を考える（3）」『図書新聞』第  
 三二一七号（連載一三八） 二〇一三年七月

「武術伝授について…カセム・ズガリさんとの対話から」（再掲）『赤門合気道』平成二五年度第五四号 東京大学合気道部赤門合気道倶楽部  
 二〇一三年七月

「日文研×地球研 座談会人文学がみる文化・社会・環境―たとえば『おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか』について（井上章一・阿  
 部健一・鞍田崇と）」『地球研ニュース』No. 3 二〇一三年七月

## 井上章一

### ●著書

『伊勢神宮と日本美』講談社学術文庫 二〇一三年四月

『性欲の研究―エロティック・アジア』（編著）平凡社 二〇一三年五月

### ●その他の執筆活動

「ゆたかな番組をささえるもの」辻一郎・音好宏監修『テレビの未来と可能性―関西からの発言―』大阪公立大学出版会 二〇一三年四月

「書評 村井康彦著『出雲と大和』」『週刊ポスト』二〇一三年四月五日号

「書評 エティエンヌ・バリリエ著『ピアニスト』」『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一三年四月一七日

「ラブホテルとシンデレラ城」『中央公論』二〇一三年五月号

「恐竜たちと伊勢神宮」『本』二〇一三年五月号 講談社

「書評 奈良岡聡智著『八月の砲声』を聞いた日本人」『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一三年五月八日



「対談 西のエッチ 東のエッチ（鹿島茂と）」「対談 上海モダンの風俗事情―ソーブランドからチャイナドレスまで―」（劉建輝と）」「ハルビン紀行の日本人―大日本帝国の欲望と、裸になったロシアの女たち」「乳」と『おっぱい』『性欲の研究―エロティック・アジア』平凡社 二〇一三年五月

「書評 森正人著『ハゲに悩む』『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一三年五月二九日

「書評 ニコラス・エヴァンズ著『危機言語』『週刊ポスト』二〇一三年五月三一日号

「現代の建築家・一三 白井晟一―民衆的な、あまりに民衆的な』『GA JAPAN』122 二〇一三年五月

「書評 青山通著『ウルトラセブンが「音楽」を教えてくれた』『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一三年六月一九日

「日本語で書くということ―関西人の立場から」郭南燕編『バイリンガルな日本語文学―多言語多文化のあいだ』三元社 二〇一三年六月

「思想史と宗教史の、その裏側は―近代日本のキリスト教受容をめぐる」刈部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士編『岩波講座 日本の思想 第六巻 秩序と規範―「国家」のなりたち』岩波書店 二〇一三年六月

「サンバの国に見られぬ日本の管理意識』『中央公論』二〇一三年七月号

「テラーニにみちびかれ』『磯崎新建築論集 月報5』岩波書店 二〇一三年七月

「書評 槇文彦・神谷宏治編著『丹下健三を語る』『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一三年七月一〇日

「京季行 祇園祭と夏 絢爛と質素 鮮やかな対比』『読売新聞』二〇一三年七月一日

「書評 吉松隆著『作曲は鳥のごとく』『週刊ポスト』二〇一三年七月二二日号

「シンポジウム伊勢へ七度…日本人の巡礼観」（神崎宣武・ジョン・ブリン・高媛と）『伝統文化』No.48 平成二五年・夏号 二〇一三年七月

「対談 安土桃山時代は、本来、安土大坂時代のはずです。古墳時代にしても……（樋口武男と）』『週刊文春』二〇一三年七月二五日号

「書評 小野清美著『アウトバーンとナチズム』『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一三年七月三一日

「日文研×地球研 座談会 人文学がみる文化・社会・環境―たとえば『おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか』について（稲賀繁美・阿部健一・鞍田崇と）』『地球研ニュース』No.43 二〇一三年七月

「現代の建築家・一四 村野藤吾―戦時をくぐり、マルクスを読みぬく』『GA JAPAN』123 二〇一三年七月

「解説」花房観音著『女坂』講談社文庫 二〇一三年八月

「暈の末路」『現代風俗』二〇六 二〇一三年八月

「書評 竹下節子著『戦士ジャンヌ・ダルクの炎上と復活』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一三年八月二一日

「国家を性欲から考える ZINCLO:BLUE 002 井上章一」株式会社グレイプス 二〇一三年八月

「現代の建築家・一五 吉田五十八―数寄屋は明るく、艶やかに」『GA JAPAN』124 二〇一三年九月

「京都人嫌いの、京大びいき」『コトバ』二〇一三年秋号 二〇一三年九月

「古書店の棚におかれた子供の夢」(再録) 週刊朝日編集部編『忘れられない一冊』朝日新聞出版 二〇一三年九月

「書評 林浩平著『ブリティッシュ・ロック』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一三年九月二一日

「書評 鈴木涼美著『AV女優』の社会学」『週刊ポスト』二〇一三年九月二〇・二七日合併号

「市井の好奇心にこそ光」『読売新聞』二〇一三年九月二三日

## 牛村 圭

### ●その他の執筆活動

「現代のことば TOEFL 推進という拝外思想」『京都新聞』（夕刊）五月一三日

「現代のことば 女王アリは空から」『京都新聞』（夕刊）六月二一日

## 榎本 渉

### ●論文

「アジアの中の建長寺―鎌倉時代の住持中の渡来僧の位置―」『禪文化』二二八号 二〇一三年四月

「元末明初の日元航路―兼及新発掘僧伝之紹介―」范金民・胡阿祥主編『江南地域文化的歴史演進文集』三聯書店 二〇一三年五月

郭 南燕

● 著書

『バイリンガルな日本語文学——多言語多文化のあいだ』三元社 二〇一三年六月

● 論文

「志賀直哉とラフカディオ・ハーン——文体上の影響に関する考察——」黄自進主編『東亜世界中的日本與台灣 東アジア世界における日本と台灣』中央研究院人文社会科学研究中心 二〇一三年七月

笠谷和比古

● 論文

「思想史と実体史との往還——丸山眞男理論の社会不適合説をめぐる議論に寄せて——」『日本思想史学』第四五号 二〇一三年九月

● その他の執筆活動

「近世の幕府と朝廷（一）徳川家康の征夷大將軍任官」『究』四月号（通卷第二五号）ミネルヴァ書房 二〇一三年四月

「近世の幕府と朝廷（二）京都と二条城」『究』五月号（通卷第二六号）ミネルヴァ書房 二〇一三年五月

「日だまりカフェ（上）東欧で盛んな日本学」『読売新聞』（夕刊）二〇一三年五月二日

「日だまりカフェ（中）原点立ち戻り日露友好」『読売新聞』（夕刊）二〇一三年五月九日

「日だまりカフェ（下）尖閣影響、中国の日本学も」『読売新聞』（夕刊）二〇一三年五月一六日

「近世の幕府と朝廷（三）徳川和子の入内」『究』六月号（通卷第二七号）ミネルヴァ書房 二〇一三年六月

「近世の幕府と朝廷（四）後水尾天皇の二条城行幸」『究』七月号（通卷第二八号）ミネルヴァ書房 二〇一三年七月

「近世の幕府と朝廷（五）高仁親王即位問題」『究』八月号（通卷第二九号）ミネルヴァ書房 二〇一三年八月

「近世の幕府と朝廷（六）紫衣事件」『究』九月号（通卷第三〇号）ミネルヴァ書房 二〇一三年九月

## 倉本一宏

## ● 著書

『文春新書九一五 藤原道長の権力と欲望 「御堂関白記」を読む』文藝春秋 二〇一三年五月

黄自進主編『東亜世界中的日本與台灣 東アジア世界における日本と台灣』（共著）中央研究院人文社会科学研究中心 二〇一三年七月

## ● その他の執筆活動

『御堂関白記の普遍的価値』『朝日新聞』（夕刊） 二〇一三年六月二六日

『撰関期古記録データベース』について』NCHIBUNKEN NEWSLETTER No. 87 国際日本文化研究センター 二〇一三年六月

『持統女帝の皇位継承構想—その破綻が生み出したもの』『やまとみち』一二九号 JR東海 二〇一三年七月

『御堂関白記』は何故にすごいのか』『文学界』二〇一三年九月号 文藝春秋 二〇一三年八月

「ようこそ—歴史史料の世界へ 『御堂関白記』『社会科 12A』」文教堂 二〇一三年

## フレデリック・クレインス

## ● その他の執筆活動

「文明史研究における外書コレクション——日本資料専門家欧州協会二〇一二年会議を振り返って」『日文研』五一号 二〇一三年九月

## 小松和彦

## ● 著書

『鯨絵——民俗的想像力の世界——』（翻訳）岩波書店 二〇一三年六月

『日本怪異妖怪大事典』（監修）東京堂出版 二〇一三年七月

『デジタル人文学のすすめ』（楊曉捷・荒木浩と共編）勉誠出版 二〇一三年七月

## ● その他の執筆活動

「あすへの話題」(連載)『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一三年四月二日、四月九日、四月一六日、四月二三日、四月三〇日、五月七日、五月一四日、五月二一日、五月二八日、六月四日、六月一一日、六月一八日、六月二五日

「故山口昌男さんを追いかけて」『京都新聞』 二〇一三年四月五日

「日本人の忘れもの四二 妖怪文化」『京都新聞』 二〇一三年四月一四日

「日本的な『和』のあり方を考えるために」『Re』No. 179 建築保全センター 二〇一三年七月

「平安京の陰陽道と安倍晴明」『歌舞伎座新聞場柿茸落 九月花形歌舞伎』歌舞伎座宣伝部 二〇一三年九月

## 佐野真由子

### ●論文

「持続可能な外交をめざして―幕末期、欧米外交官の將軍拝謁儀礼をめぐる検討から―」『日本研究』第四八集 二〇一三年九月

### ●その他の執筆活動

「欧米外交官たちが見ていなかったもの―幕末の外交儀礼から考える」『爽快』第二六号 二〇一三年四月

「京都文化芸術コア・ネットワークの発足を寿ぐ」『京都文化芸術コア・ネットワーク 設立に当たったのメッセージ―趣意書に代えて』

KACN 二〇一三年七月

“Rutherford Alcock’s Audience with the Shōgun in 1860, and the Problems Implied.” *1st EAJIS Japan Conference*, Sep. 2013.

## 白幡洋三郎

### ●その他の執筆活動

「富士山考 旅が生んだ富士山への思い」信濃毎日新聞他(共同通信配信) 二〇一三年七月一日他

「庭園史の『常識』―大名庭園の評価を通して」京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター編『庭園学講座二〇 日本庭園のモダンとポストモダン』二〇一三年九月

「ソフィア京都新聞文化会議 日本文化を根付かせた椿」京都新聞（朝刊）二〇一三年九月二九日

## 末本文美士

### ●著書

『岩波講座 日本の思想』第一～六卷（薊部直・黒住真・佐藤弘夫と共編）二〇一三年四月～九月

『浄土思想論』春秋社 二〇一三年七月

### ●論文

「災害と日本の思想」『いわきから問う 東日本大震災』昌平齋出版会 二〇一三年六月

「身心の深みへ」薊部直・黒住真・佐藤弘夫・末本文美士編『岩波講座 日本の思想 第五卷 身と心——人間像の転変』岩波書店 二〇一三年九月

### ●その他の執筆活動

「資料編集 鈴木大拙英訳『碧巖録』関係資料」『松ヶ岡文庫研究年報』第二七号 財団法人松ヶ岡文庫 二〇一三年三月

「近代と宗教」（連載）『朝日新聞』（大阪本社版・夕刊）二〇一三年四月二二日、五月二七日、六月二四日、七月二九日、八月二六日、九月三〇日

「仏教思想の再検討（講演記録）」『衆會』一八 真宗大谷派教学研究 二〇一三年六月

## 瀧井一博

### ●著書

『明治国家をつくった人びと』（講談社現代新書）講談社 二〇一三年六月

### ●その他の執筆活動

「政治学の古典を読む（三） 二つの constitution バジヨット（小松春雄訳）『イギリス憲政論』中公クラシックス、二〇一一年」『究』五月号

〔通巻第二六号〕 ミネルヴァ書房 二〇一三年五月

〔伊藤博文と United States〕『本』二〇一三年七月号 講談社

〔政治学の古典を読む（四） デマゴグとしての政治家 マックス・ヴェーバー（脇圭平訳）『職業としての政治』岩波文庫、一九八〇年』『究八月号（通巻第二九号） ミネルヴァ書房 二〇一三年八月

## 戸部良一

### ● 論文

〔日本軍人の蔣介石観―陸軍支那通を中心として―〕山田辰雄・松重充浩編著『蔣介石研究―政治・戦争・日本―』東方書店 二〇一三年四月

〔日本軍人的蔣介石観〕黄自進・潘光哲主編『蔣介石與現代中國的形塑 第一冊…領袖的淬鍊』中央研究院近代史研究所 二〇一三年九月

### ● その他の執筆活動

〔マキアヴェリ『君主論』（一五一三年）―君主の持つべき特性と力とは―〕野中郁次郎編著『戰略論の名著―孫子、マキアヴェリから現代まで』（中公新書）中央公論新社 二〇一三年四月

〔リーダーシップシリーズ（第一回）昭和の指導者―中曽根康弘〕『鵬友』第三九巻第一号 二〇一三年五月

〔書評 阿南友亮著『中国革命と軍隊』『国際政治』第一七三号 日本国際政治学会 二〇一三年六月

〔文献紹介 中曽根康弘著『中曽根康弘が語る戦後日本外交史』『軍事史学』第四九巻第一号 二〇一三年六月

〔解説 西浦進著『昭和戦争史の証言 日本陸軍終焉の真実』（日経ビジネス人文庫）日本経済新聞社 二〇一三年七月

〔リーダーシップシリーズ（第二回）昭和の指導者―吉田茂〕『鵬友』第三九巻第二号 二〇一三年七月

〔書評 イアン・トール著『太平洋の試練』（上・下）』『日本経済新聞』二〇一三年七月二日

〔解説 森松俊夫著『大本営』吉川弘文館 二〇一三年七月

〔山県有朋と長州閥人脈〕『歴史読本』二〇一三年八月号

## 早川聞多

### ● 論文

“Who Were the Audiences for Shunga?”, *Japan Review* No. 26: Special Issue: *Shunga* Sex and Humor in Japanese art and literature, Edited by Andrew Gerstle and Timothy Clark, International Research Center for Japanese Studies, September 2013.

## シモン・ブリーン

### ● 著書

*Yasukuni, the War Dead and the Struggle for Japan's Past* (editor), Oxford University Press, 2013 (Reprint of Hurst/Columbia University Press, 2008).

### ● 論文

『『神都物語』—明治期の伊勢—」高木博志編『近代日本の歴史都市 古都と城下町』思文閣 二〇一三年八月

“Yasukuni Shrine: Ritual and Memory,” reprinted in Sven Saaler & Justin Aukema eds., *Course Reader 7: “The Politics of Memory in Japan and East Asia,” The Asia Pacific Journal: Japan Focus*, 2013.

### ● その他の執筆活動

「コメント 伊勢へ七度：日本人の巡礼観」（共著）『伝統文化』No. 48 平成二五年・夏号 二〇一三年七月

「編集」*Japan Review* No. 25, International Research Center for Japanese Studies, September 2013.

「編集」*Japan Review* No. 26: Special Issue: *Shunga* Sex and Humor in Japanese art and literature, International Research Center for Japanese Studies, September 2013.

## 細川周平

### ● 論文

“Shōchiku Girls, Opera and 1920s Dōtonbori Jazz” (translated by Philip Flavin), in Hugh de Ferranti and Alison Tokita (eds.), *Music, Modernity and*



*Locality in Prewar Japan: Osaka and Beyond*, Ashgate, Surrey, 2013.

“The Swinging Phonograph in a Hot Teahouse: Sound Technology and the Emergence of the Jazz Community in Prewar Japan,” in Joseph D. Hankins and Carolyn S. Stevens (eds.), *Sound, Space and Society in Modern Japan*, Routledge, London and New York, 2014.

●その他の執筆活動

『日系移民アマゾンで俳句』『読売新聞』二〇一三年五月二〇日

『沖繩系ブラジル二世作家、山里アウグストの『空想解脱小説』郭南燕編『バイリンガルな日本文学―多言語多文化のあいだ』三元社  
二〇一三年六月

『1Q68の長い長い余波』解説」竹田賢一著『地表に蠢く音楽ども』月曜社 二〇一三年七月

『音楽評 AZUMI 山中一平』『河内音頭あべのぼる一代記不常識』発売記念ライブ』『毎日新聞』(関西版・夕刊) 二〇一三年七月一六日

『音楽評 アロージャズオーケストラ』『毎日新聞』(関西版・夕刊) 二〇一三年八月二一日

松田利彦

●論文

『韓国駐劄軍参謀長 大谷喜久蔵와 韓国—大谷関係資料를 中心으로』정병욱・板垣竜太編『일기를 통해 본 전통과 근대, 식민지와 국가』소명출판 二〇一三年五月

『재일코리안과 뉴커머 문제』青蔵大学校在日코리안研究所編『재일코리안 디아스포라의 형성—이주와 정주를 중심으로』圖書出版선인 二〇一三年六月

『帝国日本の政策連鎖—内務官僚の植民地への移入と『地方改良運動』』黄自進主編『東亞世界中的日本與台灣 東アジア世界における日本と台灣』中央研究院人文社会科学研究中心 二〇一三年七月

『韓国駐劄軍参謀長・大谷喜久蔵と乙巳保護条約締結前後の韓国』笹川紀勝・邊英浩監修、都時煥編著『國際共同研究 韓国強制併合一〇〇年 歴史と課題』明石書店 二〇一三年八月

## 山田奨治

### ● 著書

『日本怪異妖怪大事典』（常光徹・飯倉義之と共編） 東京堂出版 二〇一三年七月

### ● 論文

「傑作はどこへ消えた？―デジタル複製による文化財の置換問題を考える」楊曉捷・小松和彦・荒木浩編『デジタル文学のすすめ』勉誠出版 二〇一三年八月

### ● その他の執筆活動

「ライシャワー日本研究所での1年を終えて」*NICHIBUNKEN NEWSLETTER* No. 87 国際日本文化研究センター 二〇一三年六月

「妖怪データベースから妖怪事典へ」項目執筆『狐』『狸』『妖怪の呼称』他「五件」小松和彦監修、常光徹・山田奨治・飯倉義之編『日本怪異妖怪大事典』東京堂出版 二〇一三年七月

## マルクス・リュッターマン

### ● 論文

“Die Striche sind beisammen (gatten). Zur Mehrheitsfindung im mittelalterlichen Japan,” [Counting Brushstrokes (Gatten). Decision Making by Majority Rule in Medieval Japan, 合点 日本中世における多数決定について], Egon Flaig (Hg.) *Genesis und Dynamiken der Mehrheitsentscheidung*, Muenchen: Oldenbourg (Historisches Kolleg).

### ● その他の執筆活動

『当然』の陥井』『日文研』五〇号 国際日本文化研究センター 二〇一三年三月

## 劉 建輝

### ● 著書

『垂洲概念史研究 第一輯』（中国語・孫江と共編）生活・読書・新知三聯書店 二〇一三年四月

●論文

「侮蔑、趣味、そして憧憬から脅威へ―近代日本知識人の中国表象」上垣外憲一編『一九三〇年代東アジアの文化交流』思文閣出版 二〇一三年五月

「満洲ロマンの文学的生成―『満洲浪漫』と『芸文志』同人の活動を中心に」石田仁志他編『アジア遊学一六七 戦間期東アジアの日本語文学』勉誠出版 二〇一三年八月

「中国開埠地…日本『近代』從這里開始」（中国語）楽黛雲・楊慧林編『比較文学與世界文学 第三期』北京大学出版社 二〇一三年八月

●その他の執筆活動

「日中の文化的理解―戦前から結ばれた強い絆」『産経新聞』（大阪版・夕刊）二〇一三年四月一八日

「対談 上海モダンの風俗事情―ソーブランドからチャイナドレスまで―（井上章一と）井上章一編『性欲の研究―エロティック・アジア』平

凡社 二〇一三年五月

「張家口と近代日本」NICHIBUNKEN NEWSLETTER No. 87 国際日本文化研究センター 二〇一三年六月

『帝国』史としての日本研究―日文研プロジェクトの試み』『日文研』五一号 二〇一三年九月

日文研 五十二号

二〇一四（平成二六）年三月三十一日発行

編集 磯前順一、光田和伸

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五—二二二一

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社





**NICHIBUNKEN**

國際日本文化研究七

卷一

一

四

年

三

月

〇

一

二

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研

五

十

五

日

文

研